2017
|
2018

東京都庭園美術館
紀 要

TOKYO METROPOLITAN TEIEN ART MUSEUM

The Bulletin

東京都庭園美術館では、エレベーター設置工事による全面休館後の再オープンを飾る展覧会として「装飾は流転する Decoration never dies, anyway」展を開催した。

本紀要では、この展覧会を担当した学芸員２名による、展覧会終了後に改めて考えたことをまとめた論考を掲載する。なお、会期中に出版した展覧会カタログに、展覧会の開催意図として樋田豊次郎「装飾よこんにちは」、および参加作家と出品作品の解説を掲載している。

展覧会概要

装飾は流転する　「今」と向きあう７つの方法
Decoration never dies, anyway

東京都庭園美術館
2017 年 11 月 18 日-2018 年 2 月 25 日
主催：公益財団法人東京都歴史文化財団 東京都庭園美術館
後援：イラン･イスラム共和国大使館、オランダ王国大使館、タイ王国大使館、ブリティッシュ・カウンシル、ベルギー大使館、公益財団法人アーツフランダース・ジャパン
協力：株式会社テシード、サンコロナ小田株式会社
年間協賛：戸田建設株式会社

ポリフォニーを通じて考える「装飾」

八巻香澄（東京都庭園美術館 学芸員）

Kasumi YAMAKI

Curator, Tokyo Metropolitan Teien Art Museum

ポリフォニーを通じて考える「装飾」

東京都庭園美術館　学芸員　八巻香澄

当館にて開催した「装飾は流転する　Decoration never dies, anyway」展は、装飾という行為が、現代社会に生きる私達にとってどのような意味を持つのかを考える展覧会として構想された。これまでも当館では工芸や装飾美術を扱う展覧会を数多く開催してきたが、2016 年 7 月に樋田豊次郎氏が 3 代目館長として着任し、新たに当館で扱うべき展覧会のテーマとして「装飾」をキーワードとして据えた。しかし「装飾」という言葉はあまりに茫漠とした言葉でもある。伝統技術による工芸品をイメージする人もいれば、美術史・デザイン史のデザイン区分に関わる建築の装飾様式を思い起こす人もいれば、ファッションや雑貨など身のまわりのものを想定する人もいるだろう。当館はアール・デコ建築の美しい建築空間が大きな見どころとなる美術館であり、誰もがその装飾を美しいと評してくれるが、その一方で装飾は付加的・付随的なものであって究極的には不要なものだというモダニズム的発想も拭い去れない。「装飾」というテーマを、現代社会の中でアクティブな問いとして立ち上げることはできるのだろうか。

展覧会を担当した学芸員 2 名（筆者と田中雅子）は、「装飾とは何だろうか」という素朴な探求から企画をスタートさせた。ネアンデルタール人が死者に手向けたという弔いの花、デコ弁やデコトラのような現代日本の文化、様々な文化圏に見られるタトゥーや身装、手芸、民芸、モダニズムの造形言語の中の装飾性など、さまざまなものが脳内のイメージボードを飾った。そしてディスカッションしながら、私達が装飾について考えるにあたって多くの示唆を与えてくれる作家・作品をセレクトした。ヴィム・デルヴォワ、ニンケ・コスター、コア・ポア、アラヤー・ラートチャムルーンスック、髙田安規子・政子、山縣良和、山本麻紀子の 7 人による作品は、手工芸的な美しさを特徴としたいかにも装飾的な作品もあれば、作家本人も「装飾」というキーワードでとらえていたわけではない作品もある。本展は、現代における装飾の動向を紹介するというものではなく、装飾とは何かという問いを観客と共有するための装置なのである。

そこで、装飾についてどう考えるかを観客にも提示してもらう仕掛けとして、本館の旧喫煙室をラウンジと名付け、観客にコメントを書いてもらった。そしてそれを他の観客も読むことができるように、有孔ボードにフックをつけて記入したコメントカードを掛けるという方法にした。

その場に掲示された問いかけは、次の通りである。

ラウンジ　Lounge

この部屋では、本展参加作家による「装飾」について考えるヒントをご紹介しています。
ぜひみなさんのアイディアも教えてください。

「装飾」という言葉から連想するものは何ですか？
一つ選んでください、というと悩んでしまうかも知れません。
でも 10 個あげていいなら、いくつか気軽に思いつくでしょう。

その 3 個目か 4 個目に思いついたものについて、
もうちょっと考えてみましょう。
それは、あなたの好きなものですか？
あると元気になるものですか？
あなたにとって意味のあるものですか？必要なものですか？
誰のために、何のためにあるものですか？

そして初日には、展覧会カタログに掲載するために執筆してもらったアーティスト･ステートメントから編集した、参加作家のコメントを掲示した。「装飾は、何の変哲もないものに新たな価値を与える力がある、と私達は思います。（髙田安規子・政子）」、「私は『装飾』を、人を惹きつけると同時に、不快にさせるものとして認識しており、親密さを演出することもあれば、距離感を作り出すものであると考えている。それらを同時に表現することができるとすれば、この上なく興味深い。（アラヤー・ラートチャムルーンスック）」、「玄関先に何気なく置いている植木鉢も、道を

歩いている人の歩き方や持ちもの、視線を向ける先・・・それも、その人の『装飾』だと思います。(山本麻紀子)」など、作家の言葉は彼らの作品を理解する大きな助けとなる。そしてこの作家たちの 14 枚のコメントカード（日本語と英語でそれぞれ作成した）を呼び水として、数多くのコメントが寄せられた。

他の観客がどのように感じたのかを知ることは楽しいし、思考を巡らせるきっかけになるということは、筆者はこれまで教育普及担当としてウェルカムルームで様々なワークを仕掛けてきた経験から分かっていた。知らない誰かが残していったイラストやコメントに影響を受けて、その発想を深めた別の表現が生まれたりする。元のイラストを残していった人はもうその場にはいないので、その両者が顔をあわせて双方向のコミュニケーションをしているわけではないのだが、間接的に対話がおこっているのだ。

ボードにコメントカードを掲示できるフックの数は 200 個。すべて埋まってしまうと、他の人のコメントカードの上に重ねるしかないが、それは心理的に憚られるという人もいることを考えて、常時 15 個くらいが空いているように、毎日開館前に調整をした。その際、よく似た意見があるものや、単なるイラストや感想（「楽しかったです」「久しぶりに来ました」など）を外し、極力様々な意見を残すように心がけた。公序良俗に反するような書き込みがあった場合には、発見したスタッフはすぐに対応するようにと申し合わせていたが、そうしたコメントは 2 枚だけで、その他は問いにちゃんと答えているもの、展覧会の感想などで、全体で 1,462 枚が寄せられた。うち、関係のないイラストや単なる挨拶のようなもの（「●●さんと来ました」など）を除くと、有効回答数は 1,282 枚。展覧会全体の入場者数が 38,493 名であったため、実際にコメントを書いてくれた観客の数は 3.3%程度ではあるが、それでも会期中毎日新しい意見が掛けられ、読む者に新しい視点を投げかけてくれた。コメントを残していかないまでも、ほとんどの来館者がこのラウンジに立ち寄り（展示順路の途中にあるので）、興味深そうに一つ一つのカードに目を通していった。

アンケートのように質問項目があるわけではない自由回答方式なので、分析方法を設計するには至らなかったのが残念だが、どのようなコメントが寄せられたか、全体の傾向などを紹介したい。まず驚いたのが、こちらは全く意図していなかったことだが、記名（本名、サイン、SNS のアカウント名など）をしていくコメントが 40%もあったことだ。これは呼び水として最初に掲示しておいた参加作家たちのコメントカードに名前が入っていたことによるのかもしれない。これは自分の意見を表明しているという自信と責任感、そして作家と観客である自分とは対等な存在であるという感覚の現れであるように筆者は感じた。おそらく最初にコメントを書いた数名の方が記名をしてカードを残したことで、後に続く人たちへの「自分の意見としてコメントを書いていいのだ」とエンパワメントにつながったのではないかと考える。特に SNS のアカウント名を記していた人たちは、そのカードの写真を SNS にアップして詳細を解説していた。

本展はすべての作品が撮影できたということもあり、SNS での反応もかなり大きかったのだが、作品の写真をあげることのできる SNS の投稿では、作品についての具体的な言及や展覧会の感想がメインになる。その点、このラウンジでは作品への言及から離れて、抽象的な思考が行われていたように思う。

掲示された問いに忠実に答えて、装飾という言葉から連想するものを 10 個リストアップし、そこから自分の言葉で抽象化していく過程を辿る回答は意外と少なく、5 %ほどであった。それよりもやはり展覧会を見て感じたことを基に、自由な形式で答えているものが多く、「(展覧会を観るまでは) ○○だと思っていたが、■■■だと感じた」(「表面的なものだと思っていたけど、実は本質なのではないかと思った」「誰かに見せるためのものだと思っていたけど、自分のために必要だったのかも」など) というような、展覧会を観ることによって変容的学習がおこっていることを示す回答も多く見られた。その顕著な例としては、展覧会を途中まで見てコメントを書いた後で、展覧会を全部見てから追記しているものもあった。(会場の制約からラウンジが展覧会順路の途中にあるため、最初に立ち寄った段階ではすべての作品を見ていない場合が多い。)

また、「自分にとって装飾とは何か」という視点で答えているものが多

く、特にファッションに関心のある 20 代 30 代の来館者が多かったためか、「鎧」「心の安定」「思いやり」「愛」「自己と社会をつなぐもの」「今と未来をつなぐもの」といった、自己と外部との接点に存在する装飾の機能に着目しているコメントが目立った。装飾について、自己の内面に問いかけ、自分ごととして考えている姿勢が見られる。それと関連して、「不要だが、自分には必要」「ないと寂しいが、過剰なのも苦しい」「真実を覆い隠す行為かもしれないが、その行為自体は真実？」などの、「〇〇であり同時に■■」という一つの結論を断じない思考の触れ幅を表出するコメントが 12%も見られた。面白いことに、その「〇〇であり」の部分に、すでに掲示されていた他のコメントカードの影響が見られるものが少なくない。隣のカードにエアリプ（Twitter で他のユーザーのツィートについて、@をつけた直接的な返信ではなく、独り言のように返事をつぶやくこと）しているかのように、他のコメントに返事をしているのだ。例えば「装飾は自意識。自分を好きな証拠」に対して、「自分に自信が持てないから装ってしまうこともある」「自分のためだけじゃなくて、相手のために装飾することもあるよ」といったコメントが見られた。

このラウンジで起こっていることは、いわばポリフォニーの現出である。「装飾とは何か」という問いに対して観客が答えるのだが、単にそれまで各自の頭の中にあった意見を表明しているだけではなく、展覧会で作品を見て、またこの場で他の人の意見を踏まえた上での対話を行っているのだ。

ポリフォニー（Polyphony）とは、ドストエフスキー文学の研究者であるミハイル・バフチン（Mikhail Bakhtin）が提唱した概念で、複数の声部が対等に扱われるような音楽を差す音楽用語から語を借りてきたものである。バフチンの分析によると、ドストエフスキーの文学の中で描かれているのはただ一人の作者の意識による客体的世界ではなく、複数の対等な意識が融合することなくそれぞれの「声」を発している統一体であるという。バフチンのこの指摘は、対話主義（Dialogism）における対話の本質でもある。共感や説得ではなく、相手の「声」を受けて考えたこと感じたことを、新しい「声」として返し、その偶発性のあるプロセス自体が重要であり、その「声」はどれも等価に尊重される。ラウンジのコメントカードは、展覧会に展示されている作品たちを口火として、作家も観客も等しく対話を行う空間を、顕在化させている。

このような対話がおこった理由の一つは、展覧会自体が 7 組の作家たちのグループ展で、作家達がそれぞれ全く異なる観点から「装飾」について考え、作品化していたからであろう。すでにそこに 7 つの異なる「声」があったのである。そして作品について解説したハンドアウト（観客が手元で読む印刷物）はあったものの、作品の展示された空間に学芸員の解釈

による解説を置かなかったことで、美術館の「声」が支配的になることなく、観客の「声」を招き入れることができたのではないか。

それも受け取った上で、さらに筆者も「声」を重ねたい。展覧会準備の過程で作家たちと対話を重ねて考えたこと、展覧会がはじまって様々な寄せられた感想や意見、そしてラウンジのコメントカードから筆者が考えたことは、装飾とは早急に結論を下さずに耐え、そこに意識を向け続けるⁱことなのではないかということだ。

例えばアラヤー・ラートチャムルーンスックの《タイ・メドレー》から、葬送の儀式は何のために生まれたのかという問い。例えば山縣良和の数々の作品に見る、ファッションの存在理由の探求。例えばヴィム・デルヴォワが装飾を「影響力のアート」と呼ぶ理由。装飾をそこに介在させる理由は、そこに意識を長く留め、探求させ、答えを探させ、しかし短絡的に結論を導き出させないためではないだろうか。模様も何もないところを長く凝視するのは難しい。興味を引くものが何もないことを考え続けることも、特徴が何もないものを何度も思い起こすことも難しい。だからそこに装飾を施し、長く見つめ、考え続けることができるようにするのではないだろうか。それは、効率的にジャッジをすることが求められる現代社会において、一見して不合理であるかもしれないが、貯水する森林のように、私達に大切なものを涵養してくれる存在である。

要か不要か、本質的なものか付加的なものか、ポジティブなものかネガティブなものか―ラウンジのコメントシートも、その両極の間を揺れ動き迷うものが多く見られた。しかしそれ自体が装飾の装飾たるゆえんであるのかもしれない。多くの人と「装飾とは何か」という問いを共有し、考えることができたことは、今後も「装飾」をキーワードとしていく当館にとっては大きな成果であった。この展覧会における最初の対話の登場人物である作家たち、同僚の田中雅子、そして展覧会の実現に力をお貸しくださった全てのみなさまに感謝すると共に、今後も観客とのポリフォニーの中から、装飾の存在しつづける理由を浮かび上がらせたい。

---

[i] ネガティブ・ケイパビリティ（negative capability）という、イギリスのロマン主義詩人のキーツが生み出した「どうにも答えの出ない、どうにも対処しようのない事態に耐える能力」を指す概念を想定している。1970 年代にイギリスの精神科医・精神分析医であるウィルフレッド・ビオンが精神分析に必要な能力としてネガティブ・ケイパビリティとうい言葉を引用したために、精神医学の世界で広がり、「対話を重視する医療・福祉・教育の分野で近年脚光を浴びている

祝祭のあとに

田中雅子（東京都庭園美術館 学芸員）

Masako TANAKA

Curator, Tokyo Metropolitan Teien Art Museum

祝祭のあとに

東京都庭園美術館　学芸員　田中雅子

「装飾」は、現存する稀有なアール・デコ建築を本館として据える当館にとって重要なテーマであることは言うまでもないが、個人的には明確な関心を持っていたわけではない。思いがけず「装飾」をテーマにした展覧会のキュレーションに関わることとなり、「装飾とは何か？」という問いからスタートした。最初に普遍的な定義があって結果を得たのではなく、思考と実践が同時進行するかたちで、展覧会は作られた。まわり道をしながらも、7名の作家たち、そして共同キュレーターである八巻香澄との対話から多くの示唆を得ることができた。彼らと試行錯誤を重ね、アール・デコ様式の本館とホワイトキューブの新館、ふたつの対照的な空間を作品で満たしていくその過程は、祭の前夜にも似た、熱気を帯びたものだったように思う。祝祭が終わった今、考えていることを記しておきたい。

時空を越えて人類の営みとともにありながら、賞賛と軽蔑、陶酔と落胆の間で常に揺れ動いてきた装飾の意味は、今も変化している。本展では、その動きを止めて評価したり、「装飾美術」のような用語で括られる特定の領域に分離するのではなく、既存のジャンルを越えて生まれている表現の中に、現在進行形の意味、そして新しい装飾の可能性を見出したいと考えた。会期中に寄せられたヴァラエティーに富む反応を見る限りは、「装飾」は、その外観や手業の華麗さをただ賞でる対象ではなく、今を生きる私たちの思考を刺激し、新しい可能性を予感させる問いとして機能したのだと信じたい。

装飾は単体では成り立たない。モチーフや色が組み合わさり、反復することで装飾は生まれる。そして装飾の行為のその先に、その対象である身体、物質、空間、なんらかの支持体が存在する。さらに、その装飾に向けられる他者の眼差しがある。「装飾」という行為は先天的に、他の事柄に積極的にかかわっていこうとする身振りをともなっているといえるだろう。本展に集った作品に通底していたのも、人が他者や世界と出合うための触媒としての機能だった。

例えばヴィム・デルヴォワは現代アートの文脈を踏まえて、「言葉を越えて物語るもの」として装飾が持つ伝播力に着目し、本来の装飾が飾ってきたものとは対極にあるものに装飾を大胆に引用する。一方で、髙田安規

子・政子はささやかな日用品（しばしば使い古されたもの）に、古代より森羅万象をあらわしてきた文様や、悠久の時間を想起させるモチーフを刻むことで、観る者の価値観や尺度を揺さぶり、意識を、いま自分が知覚している世界の外へと連れていく。ニンケ・コスターが型取り用のシリコーンラバーという意外性のある素材を用いて顕在化させるのは、人の根源的な装飾への欲望と想像力、そして人と空間、空間と装飾の関係である。山本麻紀子は私たちが普段、誰に向けるわけでもなく無意識に行っている装飾や、装飾とも呼べないような小さな行為が、他者の思いがけない解釈やコミュニケーションを誘発する可能性があることを示唆する。最も私たちの身体と他者のまなざしに近い装飾であるファッション、それによって祈りにも似た切実なメッセージを発信し続けているのは山縣良和。イラン出身の父親のもとイギリスに生まれ、現在 LA で活動するコア・ポアは、ヒップホップのサンプリングやウェブ上のイメージからインスピレーションを得て、キャンバス上の「ペルシア絨毯」に、過去と現在、古今東西の多様な文化を出合わせる。そして本展の最後に展示されたアラヤー・ラートチャムルーンスックの映像作品に映るのは、素朴な「装飾」—布地にプリントされたカラフルな花模様、花の香り、物語とそれを語りかける声—によって死者を弔う「儀式」が明らかにする生と死の曖昧な境界線である。

ここに記したのはほんの一端であり、他にも幾通りもの多様な関係性が存在する。彼らの作品は、「私」を越え、現在生きている人間だけの視野を乗り越え、無数の他者ー自然や動物、死者、これから生まれようとしているものたち、過去と未来ーとの関係の中で共に生きていることを思い起こさせる。

彼らの作品が東京都庭園美術館という一つの場所で、初めて一緒に紹介されることで生まれた「関係」もあっただろう。必ずしも「装飾」を意識していたわけではないものを含む、国籍もジャンルも世代も様々な作家たちの作品は、同じ空間で展示されることで、旧朝香宮邸のアール・デコ装飾も迎え入れながら、「装飾」の意味をめぐって互いに呼応し、予告し、ときに挑発し合う反響の装置となった。異なる色や模様が同じ場所で互いに主調し、断絶し、葛藤を繰り返しながら、ぎりぎりのところで調和するもの、本来装飾にはそういう緊張感が漲っている。それが、すでに強烈な個性をもつ空間での展示となると、さらに別の緊張が生じる。

ホワイトキューブに馴染みのある現代の作品にとって、旧朝香宮邸の空間は魅力的な反面最大の悩みの種にもなる。ホワイトキューブの空間ではあるロジックやストーリーに沿って展示構成を組み立てていくこと

ができるが、この空間ではさらに、既存の部屋のヴォリュームや装飾と折り合って展示しなければならない。異なる装飾同士が生みだす相乗効果が生まれることもあれば、相殺してしまうこともありえる。一方で空間の美しさゆえに、展示が予定調和的になる危険性も孕んでいる。その判断は必ずしも一様ではなく、実際の鑑賞者の反応からも窺えるように、しばしば観る人によって異なる。音楽の世界における和音と同じように、ある人にとっては「完全和音」に感じられるものが、別の人には不快に、逆に理論的には不協和の音程を含むものに調和を感じることがあるからだろう。アラヤー・ラートチャムルーンスックは本展に寄せたステートメントの中で、装飾のもつ両義性を次のように表現している。「人を惹付けると同時に不快にさせるもの…親密さを演出することもあれば、距離感を作り出すものであると考えている。それらを同時に表現することができるとすれば、この上なく興味深いと思う」[i] 装飾が生み出す調和にもまた、和音とも不協和音とも断定しがたいアンビバレントな関係が存在する。

人は孤立して生きることはできない。他者と関わることによって不協和音が生まれようとも、多様なものたちと共存していかなければならない。自明のことにもかかわらず、それが容易ではないことは、排他的で偏狭な態度が散見される今の世界を見れば明らかである。いつの時代も現実は、それぞれの事情を抱えていて常に複雑だった。装飾は、そこに調和を生み出そうとする人々の意思のあらわれだったと言えよう。装飾とは、世界を（たとえそれがどんなに耐えがたいものだとしても）見て見ぬふりや否認するのではなく、複雑なまま何とか「肯定」し乗り換えようとするための、そして未来に光を残すために残された数少ない方法の一つなのかもしれない。85 年前、日仏の創造性が融合することによって成された装飾が残る場所に世界中から集った作品たち、それらを巡って交わされた多くの対話の余韻とともに、そのようなことを考えている。

---

[i] 「装飾は流転する」展公式図録、東京都庭園美術館、2017 年、54 項「アーティストステートメント」より

東京都庭園美術館では、バリアフリーの環境を整えることを目標として、平成 29 年度、本館である旧朝香宮邸にエレベーター棟が増設された。本エレベーター設置工事にあたり、2016 年に重要文化財に指定された旧朝香宮邸のどの箇所にエレベーターを取り付けるか検討が行われ、旧朝香宮邸の西側に設置することが決定された。設置対象となった館の西側には、1933 年の竣工当時、館の 2 階の姫宮居間の北側にバルコニーが設置されており、このバルコニーは当部屋の扉の窓に連結しているものであったが、西武鉄道所有となった白金プリンス迎賓館時代に浴室に改装され、東京都庭園美術館開館後は、一般には非公開エリアとされてきた場所である。

今回のエレベーター設置工事にあたり、館西側のバルコニーの箇所がエレベーターと館との連結部となることが決定され、これに伴い竣工当時のバルコニーの復旧が行われることとなった。復旧にあたっては、解体作業の段階より、その手がかりにすべく残存するオリジナル素材を注意深く探し出した。バルコニーという小さなスペースであるが、そこには外壁、サッシ、床のタイル、手すり、窓台のテラコッタ、排水口の意匠にわたる朝香宮邸の素材と技法が凝縮されていた。

文化財建造物保存技術協会の岡野法子氏による論文「重要文化財（建造物）旧朝香宮邸本館姫宮バルコニーの当初仕様について」は、文化財建造物保存技術協会によって行われた、竣工当時の旧朝香宮邸のバルコニーの検証調査の記録である。

（東京都庭園美術館 学芸員　神保京子）

姫宮バルコニーの当初仕様について

岡野法子（文化財建造物保存技術協会 専門職員）

Noriko OKANO
Industrial heritage staff, The Japanese Association for Conservation of Architectural Monuments

1．はじめに

東京都庭園美術館は平成 29 年 4 月から 11 月まで全面休館し、エレベーター棟増築工事を行った。

この工事は、旧朝香宮邸として重要文化財に指定されている本館の価値を損ねることなく、建物を美術館として公開活用していく上で必要不可欠である利便性向上のためのエレベーターを設置する工事である。

エレベーターは、本館の意匠性の高い外観を損なわないよう、正面玄関のある東面、庭園に面した南面を避け、本館西側に設置した（図 1-1）。建物と接続させる部分は、2 階浴室とした。この浴室は、迎賓館時代にバルコニーと姫宮御居間北側の廊下の一部を大きく改造したものである。この浴室を当初のバルコニーの姿に整えたうえで新設するエレベーターへの接続通路とした。

本稿は、浴室を解体し、創建時のバルコニーの姿に整えるために工事中に行った当初仕様調査のレポートである。

またこのレポートは、工事完了時に作成した「東京都庭園美術館（28）エレベーター棟増築工事完了報告」原稿を一部加筆・再編集したものである。

なお創建時の仕様が記録された資料として「朝香宮邸新築工事録」（宮内省書陵部所蔵）、「御新築関係費書類」（日本大学生産工学部所蔵）がある。以下本文ではこれを「工事録」「関係費書類」と呼ぶ。

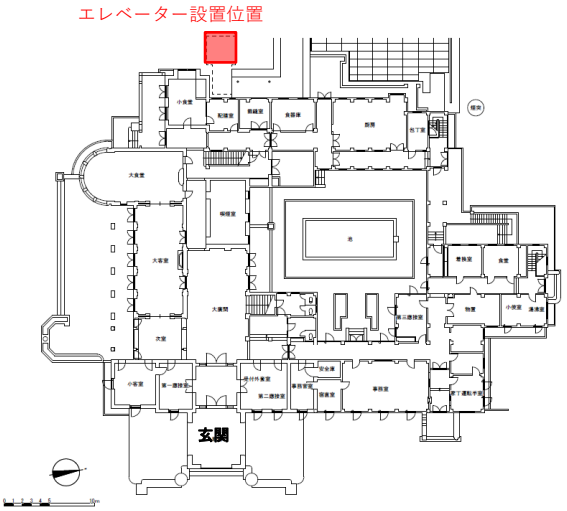


図 1-1　本館 1 階平面図（赤色はエレベーター設置位置）

写真 1-1　エレベーター棟竣工写真（本館西面）

【工事概要】

工事名称：東京都庭園美術館(28)エレベーター棟
　　増築工事

建物種別：美術館

所 在 地：東京都港区白金台五丁目 21 番 9 号

工　　期：平成 29 年 2 月 17 日～10 月 17 日

設計監理：株式会社　久米設計

（協力：公益財団法人文化財建造物保存技術協会）

施　　工：株式会社　貴津
　　冨士エレベーター工業株式会社

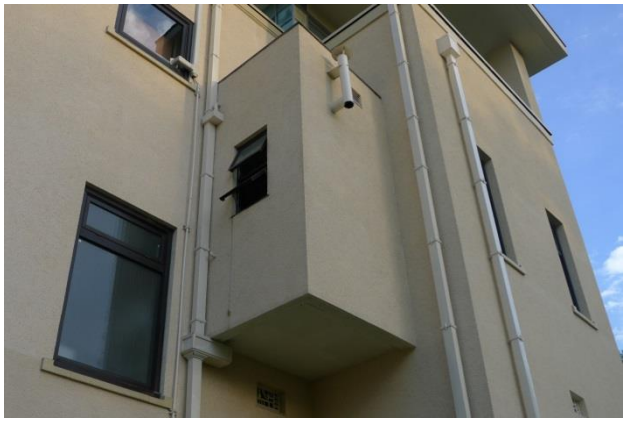


写真 1-2　工事前の浴室外観（本館西面）

写真 1-3　工事前の浴室内部　東より見る

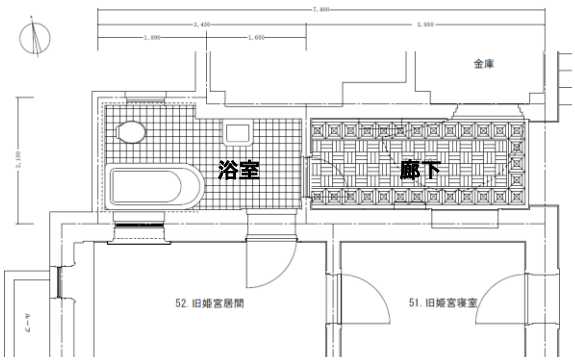


図 1-2　工事前の浴室・廊下部分平面図

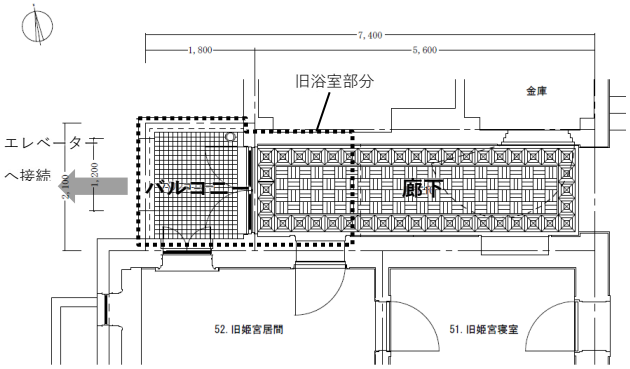


図 1-3　工事完了後のバルコニー・廊下部分平面図

写真 1-4　工事前の浴室内部　西より見る

2．バルコニー床スラブ

【解体調査】

浴室タイル貼の解体及び後設配管の撤去を行い当初バルコニー床スラブの断面を確認した。スラブ厚は 200 ㎜程でその上に約 10 ㎜のアスファルト防水層を施し、上面に金網を敷き、さらに 100 ㎜程のモルタル層を形成していた（図 2-2）。その上にはバルコニータイルの捨てモルタル層があり、当初バルコニー床タイルの裏足痕が残っていた。（写真 2-2）

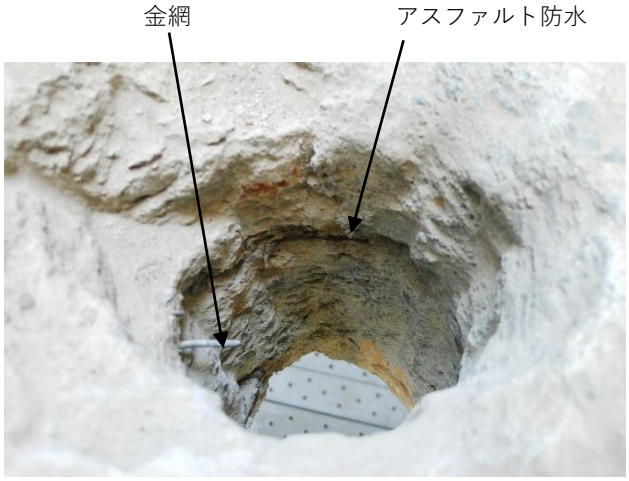


写真 2-1　浴室配管孔の断面
黒いアスファルト防水の層から金網の針金が見える。

写真 2-2　タイル裏足痕
床全面に三重丸跡が残る。黄色テープはタイルを生産した「泰山製陶所」の「泰」の文字が確認出来る箇所。

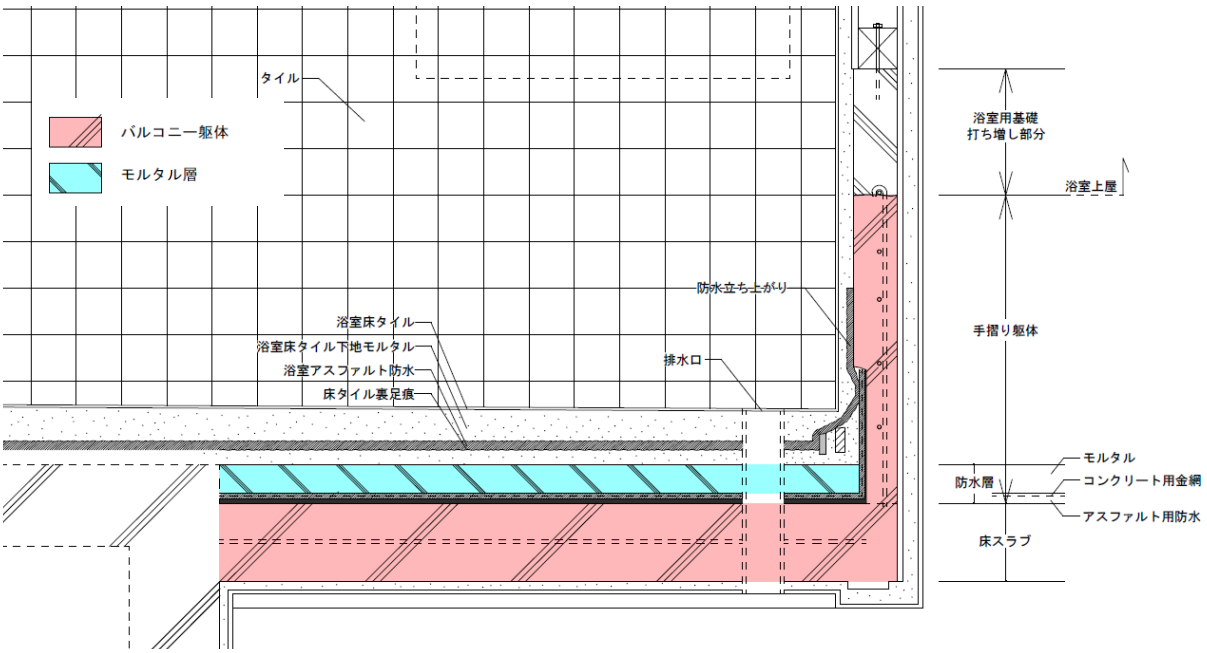


図 2-1　姫宮バルコニー躯体断面図

【資料調査】

工事録の防水工事仕様書（資料 2-1）によると、アスファルト防水を施した後、「長作式コンクリート用金網」を張り、砂利コンクリート 7 ㎝厚を打つと記述されている。この内容は今回の解体調査結果とほぼ同じであった。

なお、「長作式コンクリート金網」とは大正 11 年から 14 年に実用新案登録された金網で、少なくとも 2 種類あることが田中和幸氏の「戦前の日本における鉄網コンクリートの展開について」で指摘されている。実用新案の詳細は特許庁ホームページにより確認できる。

旧朝香宮邸本館に使用されている金網はスラブ斫り調査時にらせん状の針金交差部に丸棒を通している特徴が見られたことから「金網（実用新案 66253 号）」（資料 2-2 左図）の可能性が高い。

防水工事

（中略）

B　陸家根其他

一、アスファルト

二、フェルテックス十五封度（ポンド）

三、アスファルト

四、GF二十一號コットンクロース

五、アスファルト

六、GF二十一號コットンクロース

（中略）

一、陸屋根其他の防水層押同断とし**長作式コンクリート用金網**張り立て子砂利コンクリート厚七糎打ち

但し陸屋根其他タイル張以外の箇所は調合一、二、モルタル（防水剤適当入り）を以て厚約一、五糎鏝村なく四半目地切塗上ド…

資料 2-1　防水工事仕様書（抜粋）
「朝香宮邸新築工事録一」より

網目の交差部に鉄製丸棒を通して補強している。

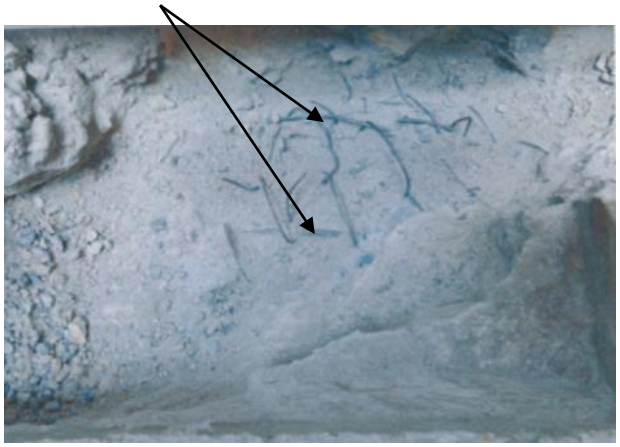
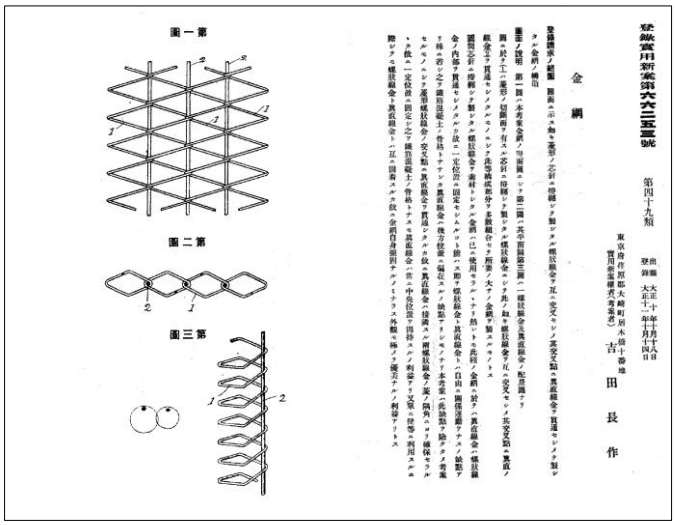
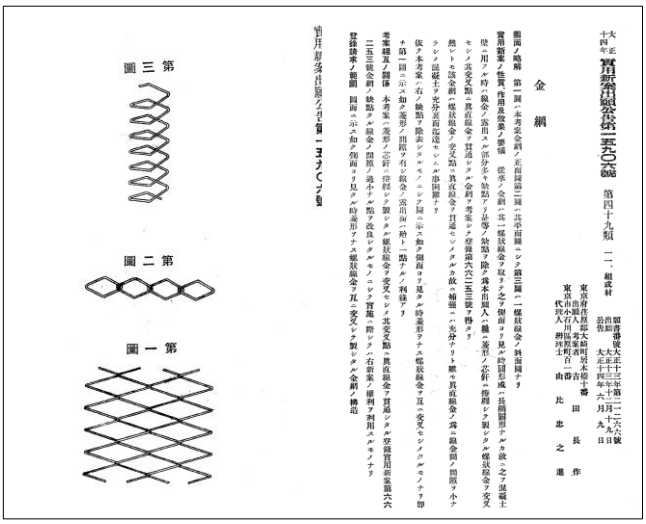


写真 2-3　スラブ斫り調査写真
金網がアスファルト防水の上に敷かれている。

写真 2-4　手摺躯体切断面写真（平面）
金網の断面が写る。





資料 2-2　実用新案「金網」特許庁「特許情報プラットホーム」より（https://www.j-platpat.inpit.go.jp/web/all/top/BTmTopPage）

【参考文献】田中和幸「戦前の日本における鉄網コンクリートの展開について」『日本産業技術史学会　第 29 回年会（2013）講演要旨 6 － 1』

3．沓摺石

【解体調査】

・石の種類と形状

事前解体調査の際、沓摺石据付位置近くに残存していた石片（写真 3-1）は、書斎バルコニー沓摺石（本御影石・兵庫県産）と同じ色合いの石であった。

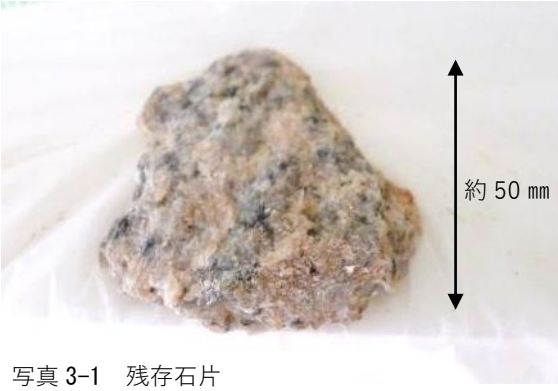


写真 3-1　残存石片

浴室床タイル下のバルコニー沓摺石位置から採取

写真 3-2　幅木タイル隅の納まり

本館側に幅木タイルが貼られている。

太矢印は石片残存箇所。

【類例調査】

沓摺石の形状については当初平面図に描かれているのみで詳細は不明であるため、本館内の沓摺石について調査を行った。

本館内沓摺石について以下①～③について比較した結果を表 3-1 及び図 3-1 にまとめた。

①石材種類

②段鼻下繰型の有無

③木敷居の有無

表 3-1　沓摺石比較表

	場所	①石材種類	②繰型有無	③木敷居有無
1	小食堂テラス	**本御影石**	繰型有	**木敷居無**
2	1 階大広間中庭側扉	**本御影石**	繰型有	**木敷居無**
3	2 階若宮居間	**本御影石**	**繰型無**	木敷居有
4	書斎バルコニー	**本御影石**	**繰型無**	木敷居有
5	妃殿下居間バルコニー	**本御影石**	繰型有	木敷居有
今回	**姫宮バルコニー**	**本御影石**	**繰型無**	**木敷居無**

※姫宮バルコニー仕様は網掛け箇所に倣った。

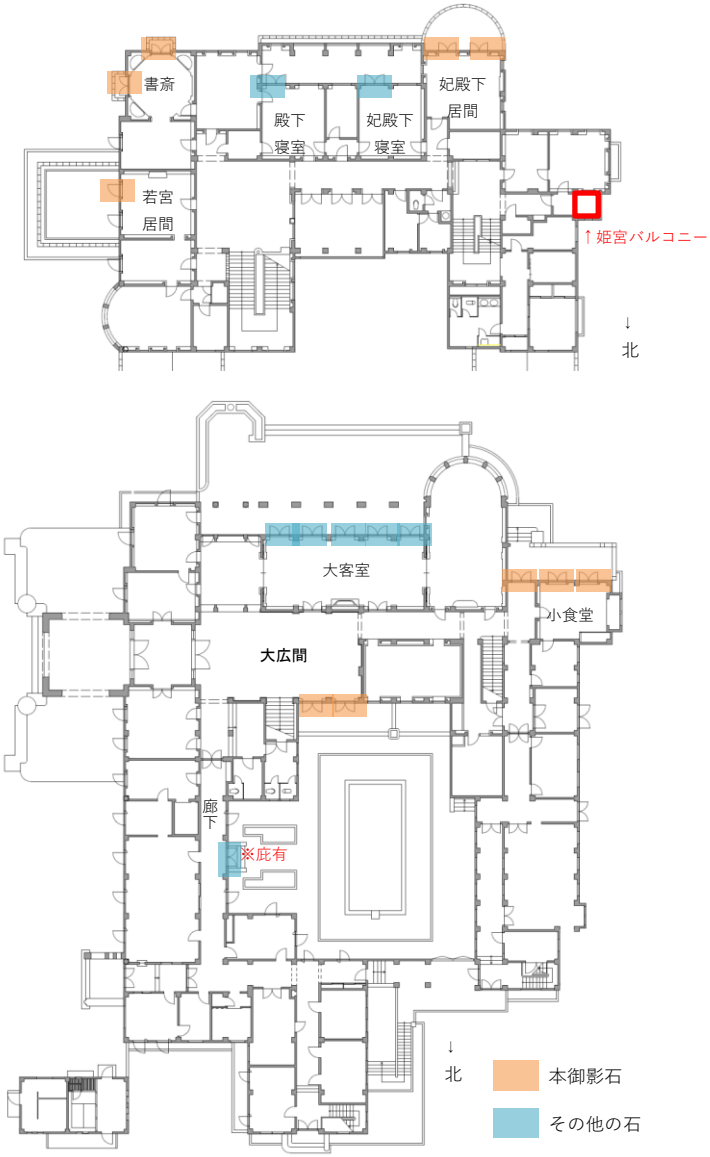


図 3-1　沓摺石調査（上：2 階平面図・下：1 階平面図）

外部に面し、雨掛かりとなる場所には本御影石が使われている。

【考察結果】

①石材は発見された石片から本御影石であることが分かる。また、沓摺石に本御影石を使用している箇所は全て雨掛りとなる場所であり、庇の下や室内には他の石材が使用されていた（図 3-1）。

②段鼻下繰型の有無については、明確なルールは確認できなかったため、書斎バルコニーに倣い繰型無しとした。

③室内側に木製敷居がある箇所は、躯体内側に壁下地がある居室に限られており、左官仕上げとなっている廊下等に木製敷居は無く、沓摺石から直接床へ接続していた。姫宮バルコニーは壁下地の無い廊下と接続するため、木製敷居は設けないこととした。

・石の割付けについて

解体調査より、建物側にあたる北東隅部に最下段の幅木タイルが残存していた（写真 3-2 赤丸部分）。一方、書斎バルコニーは、建物側に最下段幅木タイルは無く（写真 3-3 赤四角部分）、沓摺石がバルコニー幅一杯に拡がっており、姫宮バルコニーとは納まりが異なる。そのため、小食堂テラスの沓摺石の平面形状と割付を参考とした。

写真 3-3　書斎バルコニーの沓摺石

姫宮バルコニーとは幅木タイル隅と沓摺石との納り方が異なる。段鼻下繰型無し。

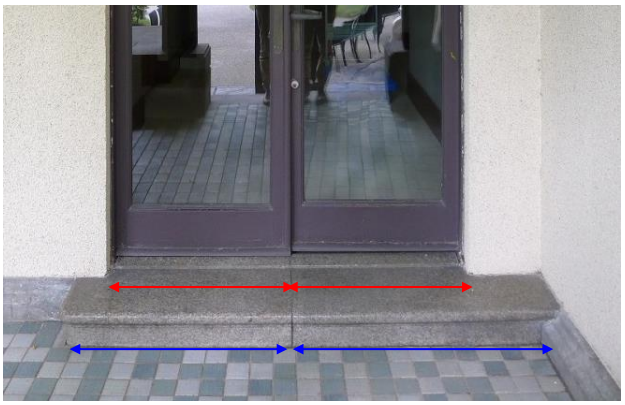


写真 3-4　1 階小食堂テラスの沓摺石割付

目地が開口部の中心にあり、石幅は左右異なる。

写真 3-5　段鼻下の繰型が有るもの

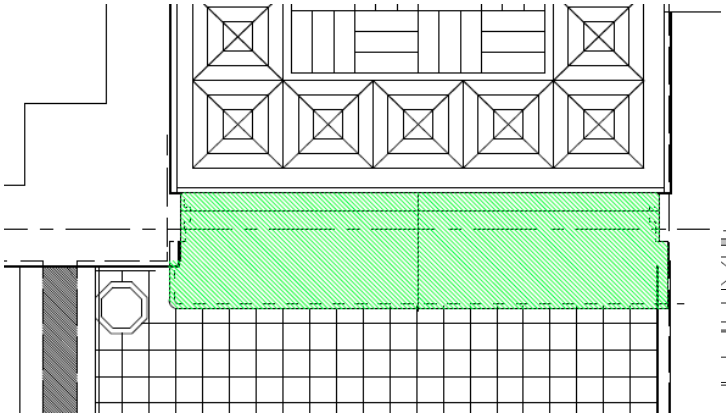


図 3-2　姫宮バルコニーの沓摺石平面形状の想定

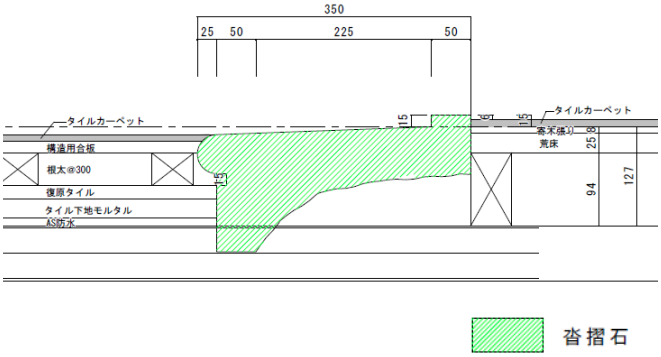


図 3-3　姫宮バルコニーの沓摺石断面形状の想定

4．タイル

【解体調査】

・幅木タイル、床タイル

浴室タイルを解体すると、バルコニー床周囲に幅木タイルの最下段（どれも上半分程度割取られている）が部分的に残存していた。全て赤色の施釉タイルであった。

写真 4-1　幅木タイルと床タイル
残存していた床タイルはこの一枚のみだった。

・床タイル裏足の痕跡

床タイルの残存は北東隅の断片（写真 4-1）のみであったが、床のほぼ全面でタイル裏足の痕跡が確認できた（写真 2-2）。全て同じ三重丸模様で、中央に「泰」の文字を確認した（写真 4-2）。
以前の改修工事で妃殿下バルコニータイル裏面からも同様の模様が確認され、京都の泰山製陶で焼かれたタイルであることが判明している。姫宮バルコニータイルも同様に泰山製陶製タイルを使用していたことが分かった。

写真 4-2　　三重丸に泰山製陶所の「泰」の字

・捨貼り用素焼きタイル

幅木タイルと手摺躯体の間に素焼きタイルが捨て貼りされていた。これには①躯体とタイル面の間のモルタルを塗る手間を減らすため、②モルタル厚塗りを避けタイル割付位置を明確にするため、③セメント材料を減らすため等の理由が考えられる。

※同様の捨て貼り施工は、重要文化財旧前田家本邸洋館渡廊下（昭和 4 頃）でも確認されている。

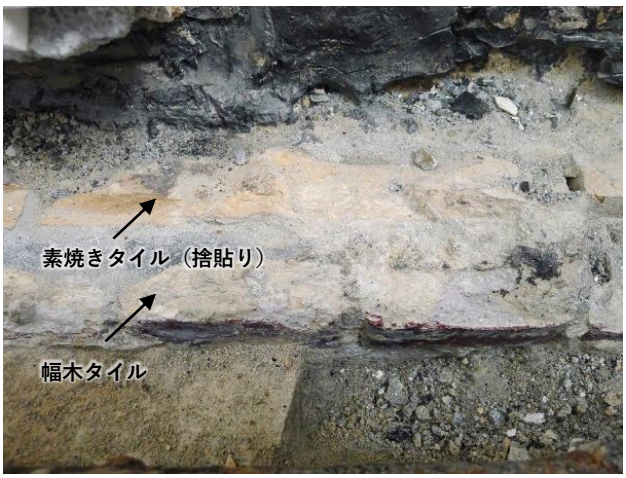


写真 4-3　捨貼り用素焼きタイル
幅木タイルの後ろに素焼きタイルの捨て貼り

写真 4-4（左）　素焼きタイル断面
写真 4-5（右）　素焼きタイル表面

図 4-1　泰山製陶所の商標
【参考文献】『日本のタイル工業史』

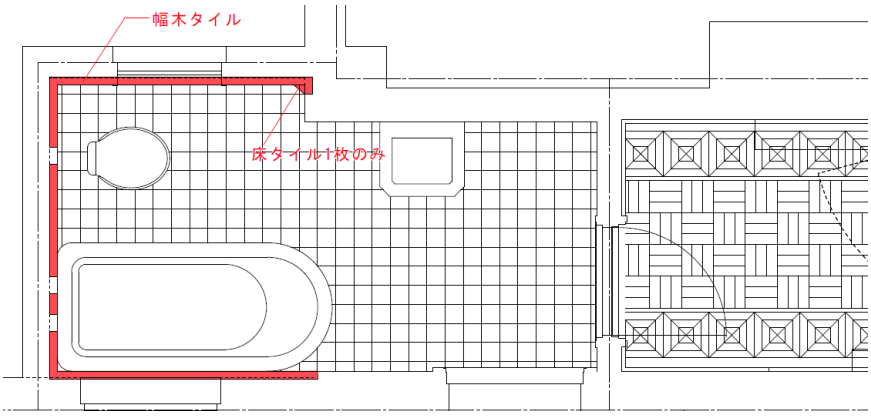


図 4-2　幅木タイル残存箇所

・タイル色調査

解体工事中に確認された床タイルと幅木タイルは全て濃い赤色の釉薬で表面の凹凸は無かった。

このうち床タイルはバルコニー北東隅に残っていた一枚のみ（写真 4-1）であった。床面については赤色以外のタイルも貼られていた可能性が捨てきれないため、解体した浴室タイルのガラの中に当初タイル片が混在していないか廃棄する前に全て確認した（写真 4-8）。

当初タイルの疑いがある破片は計 13 個見つかった。（写真 4-6）

これらの破片を顕微鏡でひとつずつ拡大し観察した（写真 4-9）。採取物№1～№7 は全て赤い釉薬層を確認し、№8～№9、11、12、13 はタイル片では無く小石等であった。№10 はタイル素地であり、釉薬層は確認出来なかった。

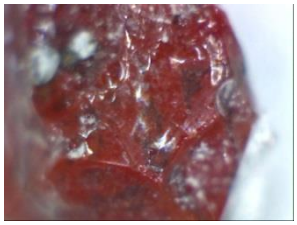
写真 4-6　採取した 13 個の破片

写真 4-7　浴室床タイル解体完了

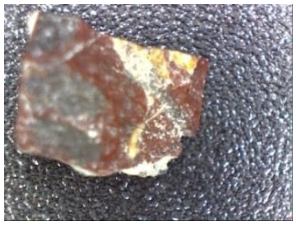
写真 4-8　当初タイルが混在していないか確認

写真 4-9　顕微鏡で拡大して観察

【顕微鏡写真１】釉薬が確認できたもの



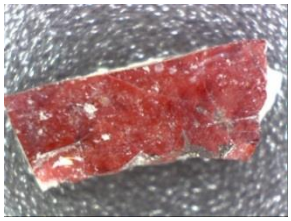
破片No.1　タイル・釉薬有



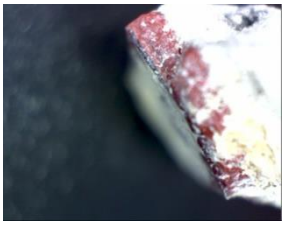
破片No.2　タイル・釉薬有

破片No.3　タイル・釉薬有

破片No.4　タイル・釉薬有



破片No.5　タイル・釉薬有



破片No.6　タイル・釉薬有

破片No.7　タイル・釉薬有

【顕微鏡写真２】釉薬が確認できなかったもの

破片No.8　小石等

破片No.9　小石等

破片No.10　タイル・釉薬無

破片No.11　小石等

破片No.12　小石等

破片No.13　小石等

【資料調査】

工事録、関係費書類によると、当初よりタイル貼が施工されていた箇所は表 4-1 の通り。

【考察結果】

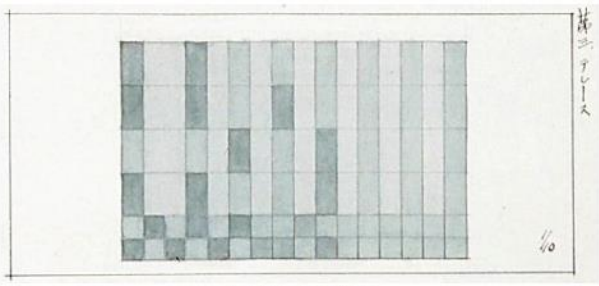
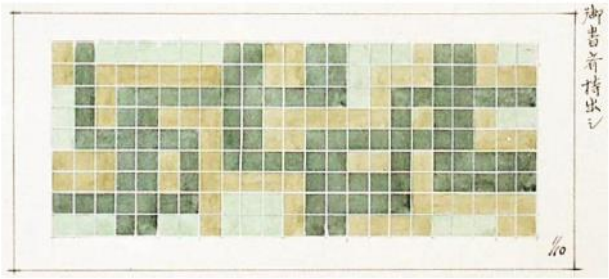
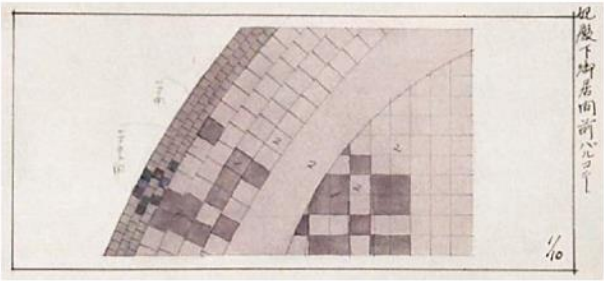
現存しているタイルで多色貼されているものについては全て彩色図面が残されているが、姫宮バルコニータイルについての図面は確認されていない。また、今回確認されたタイル片は全て赤色釉薬だったため、多色貼であったとは考え難い。

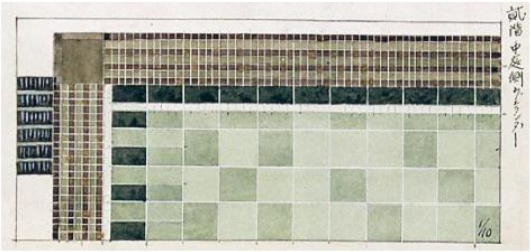
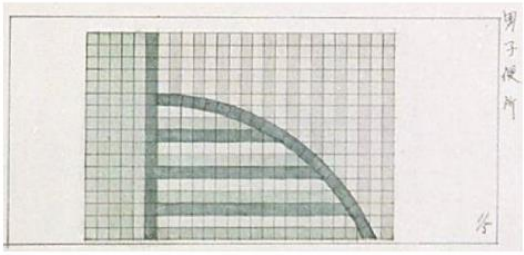
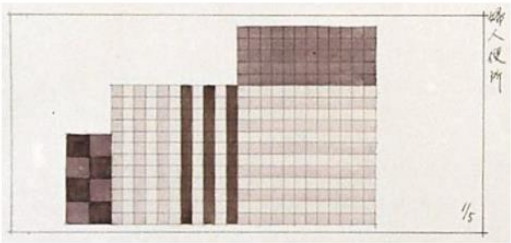
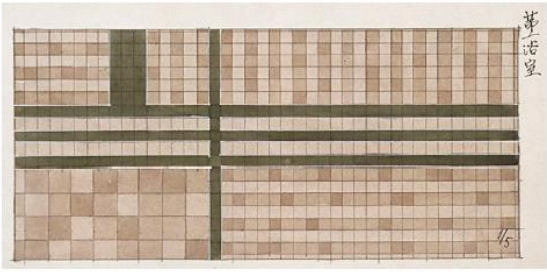
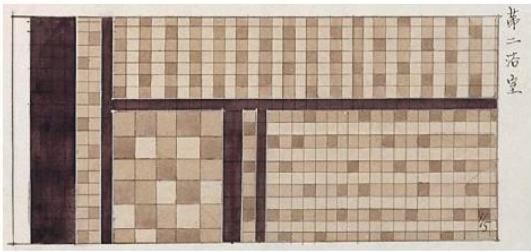
これらのことから、姫宮バルコニーの床及び幅木タイルは赤色の一色で貼られていたと判断した。

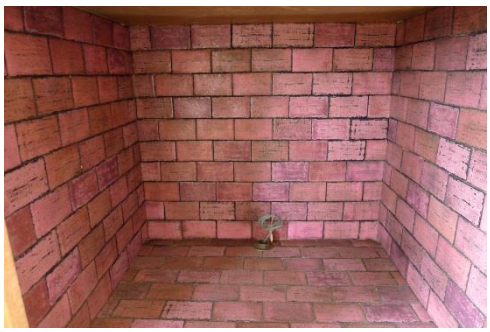
表 4-1　タイル貼箇所と仕様

No.	階数	タイル貼箇所	関係費書類等	存否	図面	模様
1	**1 階**	**第 2 テレース（中庭テラス）**	**支給品（泰山製陶製）**	**現存**	**有**	**多色**
2	**1 階**	**第 3 テレース（小食堂テラス）**	**支給品（泰山製陶製）**	**現存**	**有**	**多色**
3	**2 階**	**御書斎持出し（書斎バルコニー）**	**支給品（泰山製陶製）**	**現存**	**有**	**多色**
4	**2 階**	**妃殿下御居間前バルコニー**	**支給品（泰山製陶製）**	**現存**	**有**	**多色**
5	**2 階**	**第 2 ベランダ（北の間）**	**支給品（泰山製陶製）**	**現存**	**有**	**多色**
6	**1 階**	**客室用便所床**	**モザイックタイル張**	**現存**	**有**	**多色**
7	**2 階**	**第 1 浴室**	**モザイックタイル張**	**現存**	**有**	**多色**
8	**2 階**	**第 2 浴室**	**モザイックタイル張**	**現存**	**有**	**多色**
9	**1 階**	**事務室玄関床及び巾木**	**タイル張**	**現存**	**無**	**単色**
10	**2 階**	**第 2 浴室便所床及び腰羽目**	**タイル張**	**現存**	**無**	**単色**
11	**1 階**	**ドライエリヤ階段**	**クリンカータイル**	**現存**	**無**	**単色**
12	**2 階**	**妃殿下御居間暖炉**	**－**	**現存**	**無**	**単色**
13	**2 階**	**姫宮御居間暖炉**	**－**	**現存**	**無**	**単色**
14	1 階	第 4 テレース	其の他タイル張	無	無	不明
15	2 階	車寄上バルコニー	其の他タイル張	無	無	不明
16	**2 階**	**姫宮バルコニー**	**其の他タイル張**	**無**	**無**	**不明**
17	3 階	ウィンターガーデン脇バルコニー	其の他タイル張	無	無	不明
18	屋上	展望台	其の他タイル張	無	無	不明
19	1 階	事務室便所床及び巾木	タイル張	無	無	不明
20	1 階	厨房床及び羽目	タイル張	無	無	単色（古写真より）
21	2 階	第 3 浴室及び腰羽目	タイル張	無	無	単色（古写真より）
22	3 階	屋上陸屋根	クリンカータイル	無	無	不明

表 4-2　現存するタイル（彩色図面と写真）　　【彩色図面】朝香宮邸新築工事録（宮内省書陵部所蔵）より

1	第２テレース　図面	中庭テラス　現状写真
2	第３テレース　図面	小食堂テラス　現状写真
		
3	殿下書斎持出し　図面	書斎バルコニー　現状写真
		
4	妃殿下御居間前バルコニー　図面	妃殿下バルコニー　現状写真
		

5	第２ベランダ　図面	北の間　現状写真
		
6	客室用便所　図面	１階便所　現状写真（上：男性用、下：女性用）
		
		
7	第１浴室　図面	第１浴室　現状写真
		
8	第２浴室　図面	第２浴室　現状写真
		

9	事務室玄関　現状写真	12	妃殿下御居間暖炉　現状写真
10	第２浴室　現状写真	13	姫宮御居間　暖炉現状写真
			
11	ドライエリヤ階段　現状写真		

【タイル分析調査】

（不二窯業・LIXIL 報告書より抜粋）

浴室タイル解体時に採取した当初幅木タイル計 3 個（写真 4-11、4-12）について、表面に塗布されている釉薬及び素地を分析した。

写真 4-10　タイル採取位置

写真 4-11　タイルサンプル

写真 4-12　タイルサンプル・モルタル除去

・釉薬・素地の半定量分析（EPMA 半定量分析、蛍光 X 線半定量分析）結果は表 4-3 のとおり。

ベース釉薬は石灰バリウム釉薬、着色成分は銅である。

・素地の結晶定性分析（X 線回折）

結果は図 4-3 のとおり。

素地の結晶はクリストバライトが少し多い。

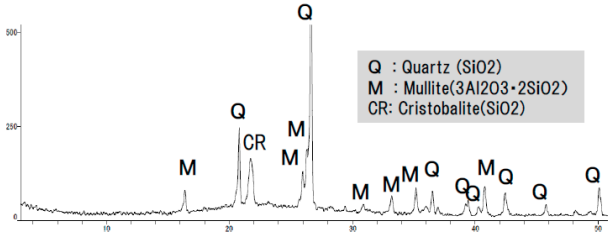


図 4-3　X 線回折

・素地の煮沸吸水測定

吸水率：9.3%

嵩密度：2.05g/cm 3

・素地・釉薬層の断面観察（マイクロスコープ観察）

素地はフラットであり、表面の釉薬も 1000μm 平滑である。

・結果まとめ

釉薬の赤色発色は銅によるもので、古くから使われている焼き物の釉薬「辰砂（しんしゃ）」と推測される。辰砂釉は銅が還元焼成により赤く発色するもの。銅の添加量と釉薬の厚み、還元の強さなどで発色が異なる。

素地成分、釉薬成分共、妃殿下バルコニータイル（泰山製陶製）と同等と考えられる。

表 4-3　釉薬・素地の半定量分析結果

	SiO2	Al2O3	Fe2O3	CaO	MgO	K2O	Na2O	TiO2	CuO	SnO2	BaO	lg-loss	Total
釉薬部	56.0	14.8	0.7	10.6	-	4.8	3.3	-	1.4	2.8	5.4	-	99.8
釉薬黒点部	-	-	-	-	-	-	-	-	94.5	5.5	-	-	100.0
素地部	71.0	22.3	1.6	1.0	0.2	2.2	0.6	0.7	-	-	-	0.7	99.7

5．手摺り・窓台テラコッタ

【類例調査】

・姫宮バルコニーの手摺り笠木の痕跡は残されていなかったため、規模・形状の近い書斎バルコニーの手摺り笠木を参考とした。

・窓台は浴室増設時、浴室内壁をタイル貼りにする際、干渉するため、外壁面から突き出している部分が斫り取られて無くなっていた。

　幸い、窓台は同様の形式の物が多数残されているため、それらを参考に断面形状を決定した。

写真 5-2　姫宮寝室窓台テラコッタ（外壁側）

浴室壁に干渉する部分は切り取られている。

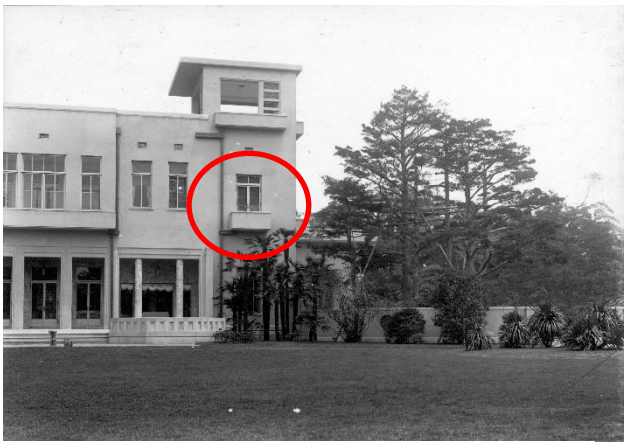


写真 5-1　本館南面古写真

赤丸部分が書斎バルコニー

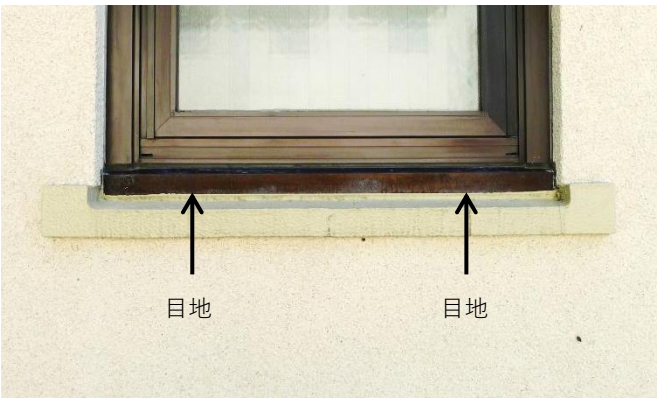


写真 5-3 本館北面窓台テラコッタ

ペンキが塗られているが、目地の凹凸の位置で 3 個のテラコッタであることが分かる。

写真 5-4 本館北面古写真

赤丸部分に姫宮バルコニーがあった。拡大すると木の陰にうっすらとテラコッタ笠木が写る。（写真 5-5 矢印部分）

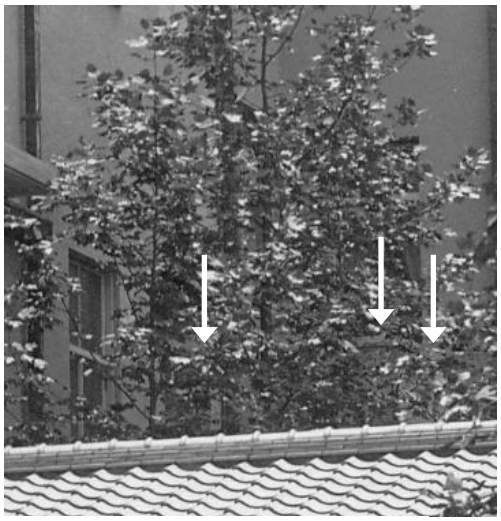


写真 5-5 本館北面古写真（拡大）

【分析調査】

テラコッタの成分分析（不二窯業・大塚オーミ陶業報告書より抜粋）は、窓台テラコッタからサンプルを採取し、サンプルの汚れを除去してから化学分析を行った。

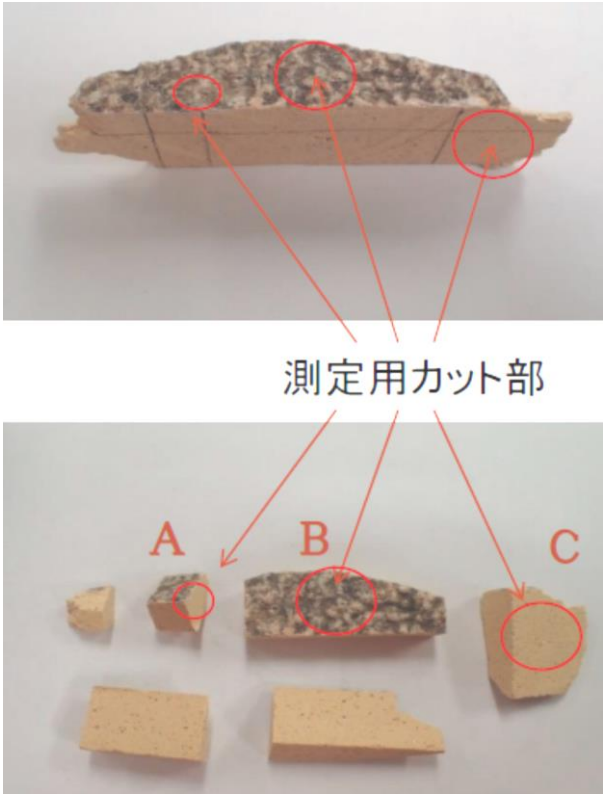


写真 5-6　分析用サンプル

・釉薬の成分分析

・A：電子顕微鏡分析（スポット的）

・B：蛍光 X 線分析（面的）

結果は表 5-1 の通り。

カリ長石を使った石灰系釉薬。発色は Fe,Ti が中心と思われる。釉薬は乳濁し、色が付いている。釉薬は一色であり、黒く見えるのは汚れの付着。

素地の凹凸よりも釉薬の凹凸が目立つ。釉薬の斑点吹きと思われる。

素地の吸水率は 15%台であり、かなり高めである。

・素地の成分分析

・蛍光 X 線分析

結果は表 5-2 の通り。

素地は比較的多くの Fe が含まれており、素地の着色になっている。

素地の密度は荒い（気泡が多い）状況である。そのため吸水率は 15.29%と高く、陶器質（現在の区分では 3 類（50%以下））である。

表 5-1　釉薬の成分分析

成分	SiO2	Al2O3	Fe2O3	TiO2	CaO	MgO	K2O	Na2O	MnO	P2O5	ZnO	BaO
	シリカ	アルミナ	鉄	チタン	カルシウム	マグネシウム	カリ	ナトリウム	マンガン	リン	亜鉛	バリウム
A	63.18	14.23	-	-	14.23	-	6.22	2.13	-	-	-	-
B	67.5	18.9	0.949	0.924	2.54	0.301	5.22	1.54	0.03	0.466	0.074	-

表 5-2　素地の成分分析（蛍光 X 線分析）

成分	SiO2	Al2O3	Fe2O3	TiO2	CaO	MgO	K2O	Na2O	MnO	P2O5	ZnO	SO3
	シリカ	アルミナ	鉄	チタン	カルシウム	マグネシウム	カリ	ナトリウム	マンガン	リン	亜鉛	硫黄
B	62.60	28.40	2.67	1.31	0.462	0.5421	2.48	0.609	0.017	0.108	0.021	0.608

6．排水口金物

【解体調査】

浴室床タイルを解体した際、北東隅に八角形の排水口金物の取付痕が確認され、穴はスラブ下の鮟鱇に接続していた。

写真 6-1　八角形の圧痕

写真 6-2　排水口真下の鮟鱇

【類例調査】

本館の排水溝のうち八角形のものについてグリル模様と大きさの関係について確認し、以下のように分類した。

①排水口枠と蓋の大きさ

・（小）　枠：130 ㎜、蓋：105 ㎜

・（大）　枠：155 ㎜、蓋：120 ㎜

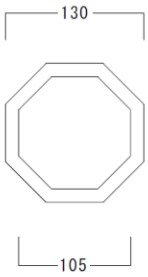


図 6-1（小）タイプ

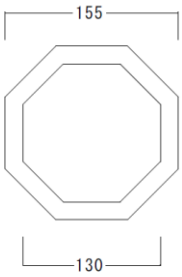


図 6-2（大）タイプ

②排水口蓋模様

・a タイプ　模様：花と蕾

・b タイプ　模様：植物（葉と新芽）

写真 6-3　a タイプ

写真 6-4　b タイプ

次ページの調査結果（図 6-4）より、（小）タイプの排水口は、蓋のデザインが a タイプであり、（大）タイプの排水口は蓋のデザインが b タイプであるため、八角形排水口は２種類であったことが分かる。

一方でバルコニーの平面積と排水口の大きさの関係に規則性は見られなかった。

【考察結果】

今回製作する姫宮バルコニーの排水口は床モルタルに僅かに残っていた枠の圧痕の寸法が（大）に近いため、（大）－ b タイプの蓋とする。

蓋が欠失している北の間は a タイプ、妃殿下バルコニーは b タイプのデザインであったと推定される。

また、目視により真鍮製鋳物であることが分かった。

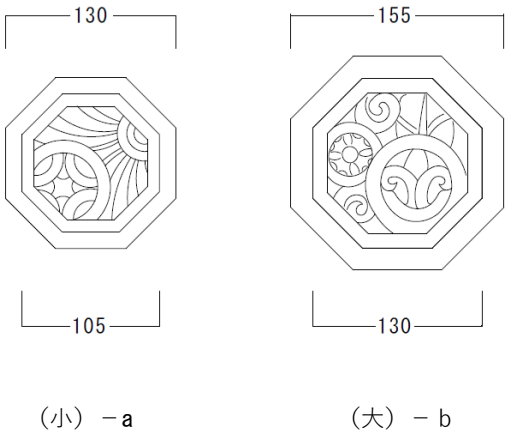
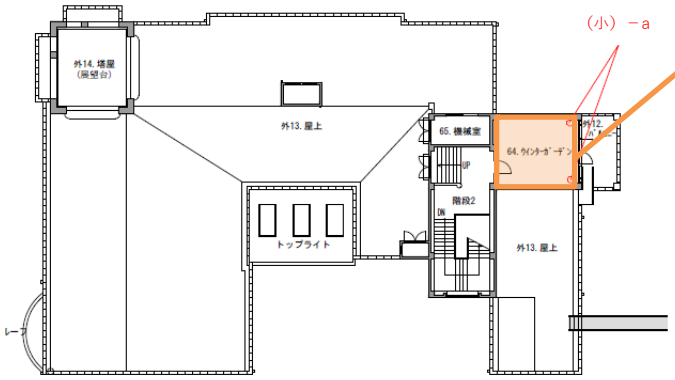


図 6-3　排水溝グリル大きさと模様の関係



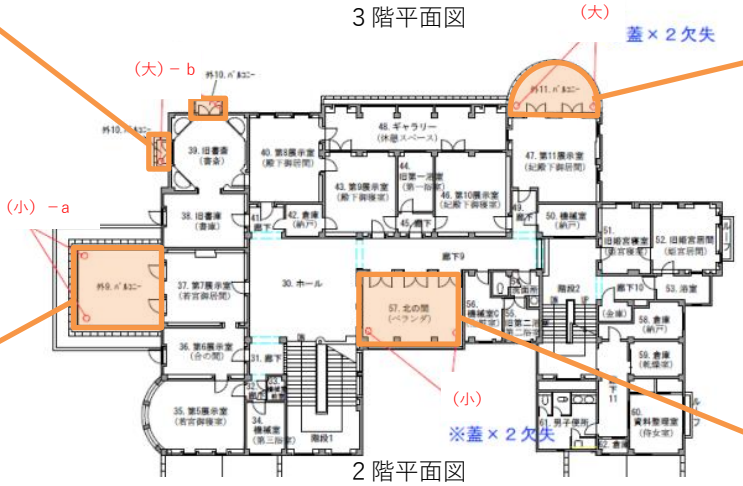
3 階平面図

64.ウインターガーデン
(小) － a

外 10.バルコニー
(大) － b

外 11.バルコニー
(大)（蓋欠失）

外 9.バルコニー
(小) － a



2 階平面図

57.北の間
(小)（蓋欠失）

1 階平面図

外 5.テラス
(小) － a

1．玄関
(大) － b

外 6.テラス
(小) － a

外 3.中庭
(小) － a

図 6-4　類例排水溝グリル

7．ラフコート塗

【解体調査】

廊下壁面のラフコート塗は表面にペンキが塗られているが、浴室天井裏にペンキで塗装されていないラフコート塗が残存していた。

天井裏のラフコート塗がおそらく当初の廊下壁面の仕上げと考えられる。

「ラフコート（RUFKOTE)」はアメリカの会社H.B.Wiggin's Sons & Chicago製の壁仕上げ材である。『最新建築材料学』(昭和11年)によると「石膏に雲母の粉末を加え、化学的処理をした特許品の内装用塗壁材料で、塗厚薄く下地との密着力強く、硬化すれば極めて堅く、仕上は各種の刷毛又は鏝模様を作り得る」とある。

今回確認された当初ラフコート塗に照明を当てると雲母の輝きが確認出来た。一方漆喰のスサのような繊維は確認されなかった。

写真 7-1　浴室天井裏に残るラフコート塗

写真 7-2　浴室天井解体後

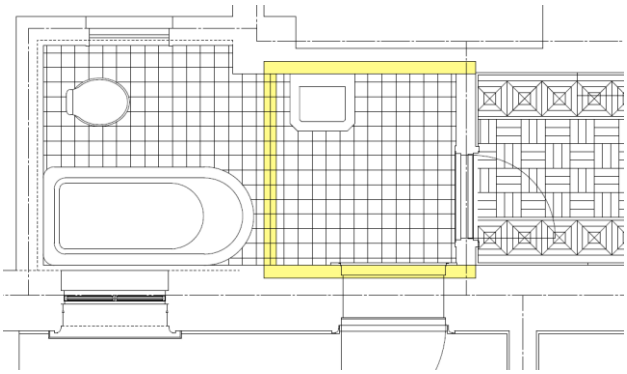


図 7-1　浴室天井裏にラフコート塗が残存していた部分（黄色く塗った部分）

写真 7-3　ラフコート塗表面
光を当てると雲母の輝きが確認できる。

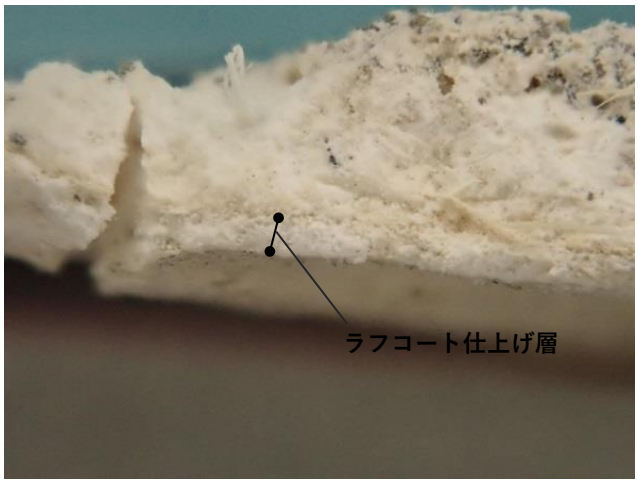


写真 7-4　ラフコート塗断面（写真下が仕上げ面）
ラフコートの層は表面の薄い部分

【資料調査】

工事録によると当初の仕様は以下のように記述されている。

内壁其他ラフコート塗
一、材料は**外国製品**を使用し模様色合等見本塗により優秀なる職工に施工せしむべし
一、下地は漆喰塗仕様同断とし定規摺仕上とす
一、下地乾燥後掃除をなしラフコート（ノロ）を平坦に二三回塗り見本塗の模様に依り海綿又は適当の器具を以て**模様を付し**乾燥後**サンドペーパーにて**摺り上げ引止液二回塗り**色素を掛け**ボロの類にて濃淡に仕上げ但し模様に依りては**金粉**其他の材料を使用せしむ
一、リシン及ラフコート共材料ハ未開封の儘持ち込みて係員の検査を受くべし

資料 7-1　内壁其他ラフコート塗仕様書
「朝香宮邸新築工事録」より

【類例調査】

当初ラフコート塗仕上げが残存している居室は以下の通り。

・１階受付外套室
・２階合之間

上からペンキが塗られているもの

・１階廊下、２階廊下、大階段

１階受付外套室と２階合之間はどちらも仕様書に記述されている内容と同様に仕上に色が塗られており、合之間は上から金色の模様が描かれていた。(写真 7-7)

写真 7-5　1 階受付外套室のラフコート塗

写真 7-6　2 階合之間のラフコート塗

写真 7-7　2 階合之間のラフコート塗（拡大）
表面に金色の模様をつけている。

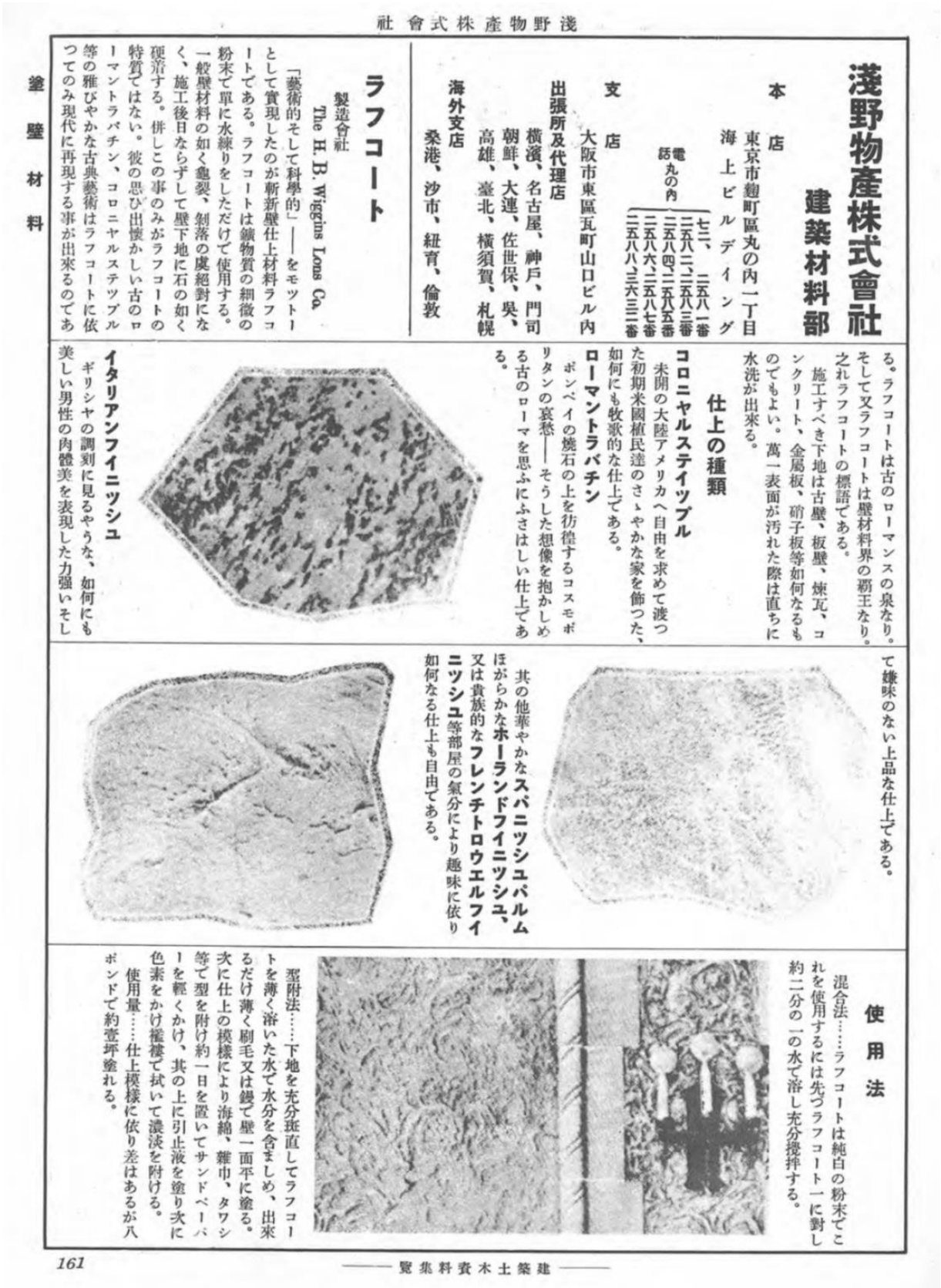
写真 7-8　ペンキを塗られたラフコート塗

【考察結果】

天井裏に残されていたラフコート塗より、当初は現在の廊下のようなペンキによる塗装はされていなかったことが分かった。

ラフコートは石膏と雲母が主成分の輸入仕上げ材であり、現在手に入れることは不可能である。今回の工事では、つなぎ材にスサなどの繊維を使用していない漆喰材料に雲母を混ぜて施工することとした。

【参考資料】当時の日本の建築資料に見られるラフコートの広告



淺野物産株式會社

淺野物産株式會社
建築材料部

本店
東京市麹町區丸の内一丁目
海上ビルディング
電話 丸の内 七二、二五八一番 二五八二、二五八三番 二五八四、二五八五番 二五八六、二五八七番 二五八八、三六三二番

支店
大阪市東區瓦町山口ビル内

出張所及代理店
横濱、名古屋、神戸、門司
朝鮮、大連、佐世保、吳、
高雄、臺北、横須賀、札幌

海外支店
桑港、沙市、紐育、倫敦

塗壁材料

ラフコート
製造合社
The H. B. Wiggins Lons Co.

「藝術的そして科學的」——をモットーとして實現したのが斬新壁仕上材料ラフコートである。ラフコートは鑛物質の細微の粉末で單に水練りをしただけで使用する。一般壁材料の如く龜裂、剝落の虞絶對になく、施工後日ならずして壁下地に石の如く硬靠する。併しこの事のみがラフコートの特質ではない。彼の思ひ出懷かしい古のローマントラバチン、コロニヤルステツプル等の雅びやかな古典藝術はラフコートに依つてのみ現代に再現する事が出來るのである。ラフコートは古のローマンスの泉なり。そして又ラフコートは壁材料界の覇王なり。之れラフコートの標語である。

施工すべき下地は古壁、板壁、煉瓦、コンクリート、金屬板、硝子板等如何なるものでもよい。萬一表面が汚れた際は直ちに水洗が出來る。

仕上の種類

コロニヤルステイツプル
未開の大陸アメリカへ自由を求めて渡つた初期米國植民達のさゝやかな家を飾つた、如何にも牧歌的な仕上である。

ローマントラバチン
ポンペイの燒石の上を彷徨するコスモポリタンの哀愁——そうした想像を抱かしめる古のローマを思ふにふさはしい仕上である。

イタリアンフイニッシュ
ギリシヤの調刻に見るやうな、如何にも美しい男性の肉體美を表現した力强いそして嫌味のない上品な仕上である。

其の他華やかな**スパニッシュパルム**ほがらかな**ホーランドフイニッシュ**、又は貴族的な**フレンチトロウエルフイニッシュ**等部屋の氣分により趣味に依り如何なる仕上も自由である。

使用法

混合法……ラフコートは純白の粉末でこれを使用するには先づラフコート一に對し約二分の一の水で溶し充分攪拌する。

型附法……下地を充分乾直してラフコートを薄く溶いた水で水分を含ましめ、出來るだけ薄く刷毛又は鏝で壁一面平に塗る。次に仕上の模樣により海綿、雜巾、タワシ等で型を附け約一日を置いてサンドペーパーを輕くかけ、其の上に引止液を塗り次に色素をかけ櫂樓で拭いて濃淡を附ける。

使用量……仕上模樣に依り差はあるが八ポンドで約壹坪塗れる。

161 ——建築土木資料集覽——

資料 7-1　ラフコート広告『建築土木資料集覧』昭和 4 年版

【参考資料】当時の海外の建築資料に見られるラフコートの広告

「インターネットアーカイブカタログコレクション」　(https://archive.org/details/catalogs) より

January 5, 1928　THE AMERICAN ARCHITECT　Page 99

RUFKOTE,—The Practical Plastic Stone—

That Is Ideal For Every Type Of Interior Wall

ITALIAN EFFECT

RUFKOTE TEXTURES are of practical use in the modern day trend of interior decoration, reflecting and recreating the colorful romance of historic periods as well as modern types, both novel and conservative in design.

RUFKOTE Plastic Stone is enduringly hard but not brittle—elastic but does not crack—and contains no harmful chemical injurious to furniture or woodwork. RUFKOTE, easily and quickly mixed with cold water, sets firmly without shrinking and is not easily marred.

Here, at last, is a perfect plastic stone—developed by one of America's oldest and most experienced manufacturers of wall coverings—that meets every critical requirement of the Architect, Decorator, and Homeowner.

Send for free sample of Rufkote—also details of RING TEST that proves permanence and non-shrinkage of Rufkote Textures.

H. B. WIGGIN'S SONS CO.
265 Arch Street
Bloomfield, New Jersey

Branch Office & Warehouse, 4860-64 So. Halsted St., Chicago, Ill.

Specifications of most products advertised in THE AMERICAN ARCHITECT appear in the Specification Manual

資料 7-2　American Architect and Architecture, 第 133 巻

C4172

H. B. WIGGIN'S SONS CO.
Manufacturers of Rufkote Plastic Stone
233 Arch Street, BLOOMFIELD, N. J.
BRANCH OFFICE: 4860 South Halsted Street, CHICAGO, ILL.

Products
RUFKOTE PLASTIC STONE for interior walls and ceilings.
WIGGIN'S SIZEKOTE.
WIGGIN'S GLAZEKOTE.
For page on Fab-Rik-O-Na Cloth Wall Coverings, see Manufacturers' Index.

RUFKOTE
TRADE-MARK

Rufkote—Plastic Stone for Interior Walls and Ceilings
Rufkote is plastic stone. For the finishing of walls where the decorative requirements suggest rough plaster or stone surfaces, it affords a ready resource of the most agreeable quality. A white powdered mineral, it is free from any animal matter and, when mixed with cold water, it becomes a texturing paint of heavy consistency. Not only is it a medium that lends itself readily to manipulation while being applied and fully plastic but, as it sets absolutely without shrinkage, there is no element of chance about the surface texture whose final appearance remains exactly the same as upon first application. Packed in 250-lb. barrels, 100-lb. kegs, 40-lb. pails, 100-lb. and 25-lb. bags.
Rufkote will not fade colors, nor will it set up adverse chemical reactions in paint pigments applied over it.
The exact colors desired may be obtained by mixing in either dry colors or colors ground in oil.

Application of Rufkote
Rufkote may be applied over plaster surfaces, either directly over the brown coat or on the finished white coat. It may also be applied over brick, concrete, wall board, wood or any other material commonly used for wall or ceiling construction.

Wiggin's Sizekote—A Cold Water Size
For sizing and sealing surfaces upon which Rufkote is to be applied and for sizing the textured Rufkote before glazing. Sizekote penetrates, stops suction, brushes out freely and is rapid drying.
Packed in 1, 5 and 25-lb. sizes.

Wherever suction is likely to occur, the surface should be sized with Wiggin's Sizekote before putting on the Rufkote. Wall boards that have not been sized in manufacture should also be given a coat of this size.

Wiggin's Glazekote—A Transparent Finish for Rufkote Surfaces—Easily Colored
A transparent glaze for finishing Rufkote surfaces. Dry pigments or oil colors may be mixed with it. It is used in producing wiped or blended color effects and makes a tough waterproof finish with an eggshell gloss, adding beauty and character to the texture. The Rufkote should be given a coat of Wiggin's Sizekote before glazing.
Packed in gallon cans and quart cans.

Distribution
Stocks of Rufkote products are carried at Bloomfield, N. J., and Chicago, Ill. Deliveries may be obtained from our jobbing distributors in prominent centers throughout the United States.

Service and Literature Available to Architects
We seek the opportunity to co-operate with architects and offer them the services of our experts regarding the proper use of our products.
We shall be glad to furnish on request a copy of our "Text Book of Textures" by F. N. Vanderwalker and folder of literature and samples of Wiggin's products. Also samples of Rufkote powder and finished boards.
All requests for information will be promptly answered.

Short Specification for Architects Use
All walls and ceilings shall be finished with Rufkote Plastic Stone as manufactured by the H. B. WIGGIN'S SONS CO., Bloomfield, N. J., in approved texture, color and *..... finish. Prepare Rufkote and treat all surfaces in accordance with instructions supplied by the manufacturer.
*Note: Here indicate texture by name such as Roman Travertine, Spanish Palm Finish, etc.

Textures Obtainable with Rufkote Are Unlimited

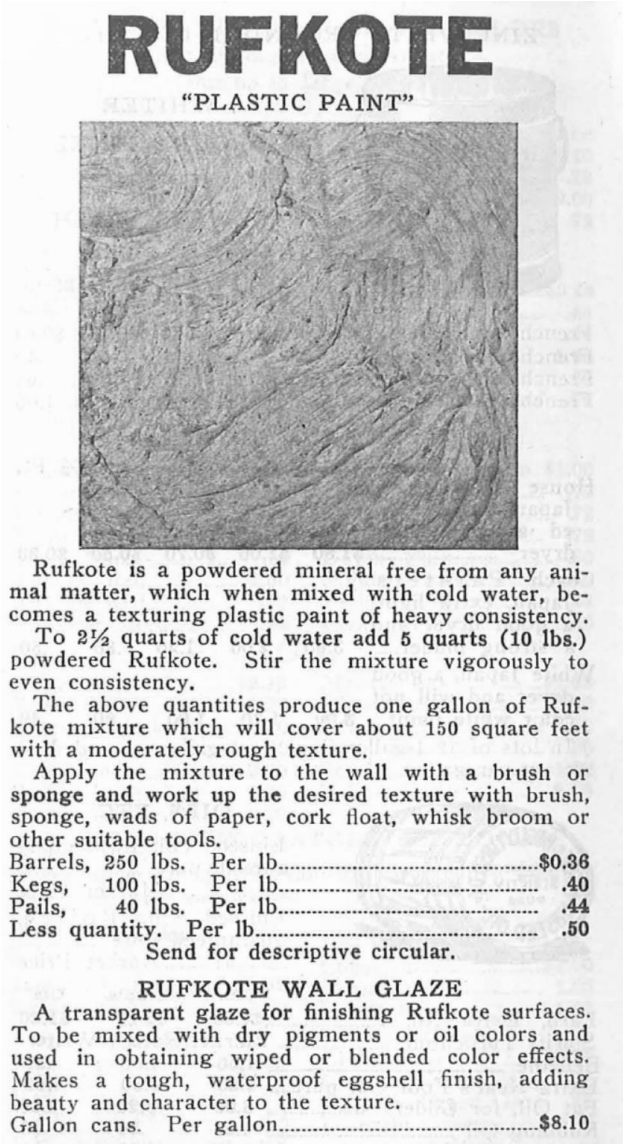
Colonial Stipple
An interesting texture expressive of the friendly atmosphere and quiet dignity of Colonial Days

The Famous Ring Test Proves Rufkote Will Not Crack or Shrink
A brass ring 3 in. in diameter and 1 in. high is placed upon a glass plate and filled with wet Rufkote. The top being struck to a smooth, true surface.
After it has thoroughly dried, no cracks or shrinkage will develop; the Rufkote still fills the ring tightly. The surface is still true and even

Italian Effect
A rugged texture—introduced during the Renaissance Period—for backgrounds in larger sized rooms

Sweet's

資料 7-3　Sweet's architectural catalogues.1931



RUFKOTE
"PLASTIC PAINT"

Rufkote is a powdered mineral free from any animal matter, which when mixed with cold water, becomes a texturing plastic paint of heavy consistency.
To 2½ quarts of cold water add 5 quarts (10 lbs.) powdered Rufkote. Stir the mixture vigorously to even consistency.
The above quantities produce one gallon of Rufkote mixture which will cover about 150 square feet with a moderately rough texture.
Apply the mixture to the wall with a brush or sponge and work up the desired texture with brush, sponge, wads of paper, cork float, whisk broom or other suitable tools.

Barrels,	250 lbs.	Per lb.	$0.36
Kegs,	100 lbs.	Per lb.	.40
Pails,	40 lbs.	Per lb.	.44
Less quantity.		Per lb.	.50

Send for descriptive circular.

RUFKOTE WALL GLAZE

A transparent glaze for finishing Rufkote surfaces. To be mixed with dry pigments or oil colors and used in obtaining wiped or blended color effects. Makes a tough, waterproof eggshell finish, adding beauty and character to the texture.
Gallon cans. Per gallon.....$8.10

資料 7-4　ラフコート広告 WatsonPaintersSupplies

RUBBER STIPPLING BRUSH
Medium, Coarse and Extra Coarse

For producing new decorative effects with Flat Wall Paint. Glaze colors and with plastic relief work, such as Rufkote effects that cannot be obtained with a bristle stippler. Very useful tool for decorators.

Rubber Stippler, 3½x5 inches.....$14.50

資料 7-5　ラフコート用の器具 WatsonPaintersSupplies

8．おわりに

今回は、後設浴室部分の撤去という非常に限定的な解体ではあったが、たった 7 ㎡弱の浴室には解体前は想像すらできなかった数々の当初仕様に関する情報が詰まっていた。

また、幸いなことに、創建時の図面や仕様書などの工事資料が多数残されていたことと、浴室以外はあまり大がかりな改造をされておらず建物全体に当初の状態を良く残していることは、非常に希な好条件であった。

これらの好条件が重なり、解体調査のみではまだ不明瞭であったことも、創建時の資料と照らし合わせ、他の居室等の設えと比較することで、より詳細な当初仕様の理解へと繋がった。

そして、判明した当初仕様の多くは今回の工事で姫宮バルコニーの本来の姿として当初仕様に整えることが出来た。

本文中では触れられなかったが、今回の工事で浴室壁面のタイルの裏から姫宮居間の鋼製建具が発見された。壁のタイルを解体すると、塗装されていない当初のメッキのままの銀色の建具が現れた。そして、およそ 50 年ぶりに開ける窓とは思えないほどスムーズに開いた時、封印が解かれた瞬間に大いに感動した。

この姫宮居間の銀色の窓は、バルコニーの赤いタイルとともに、これからエレベーターで上がってこられるお客様を温かく迎える存在になると思っている。

写真 8-1　姫宮居間の窓

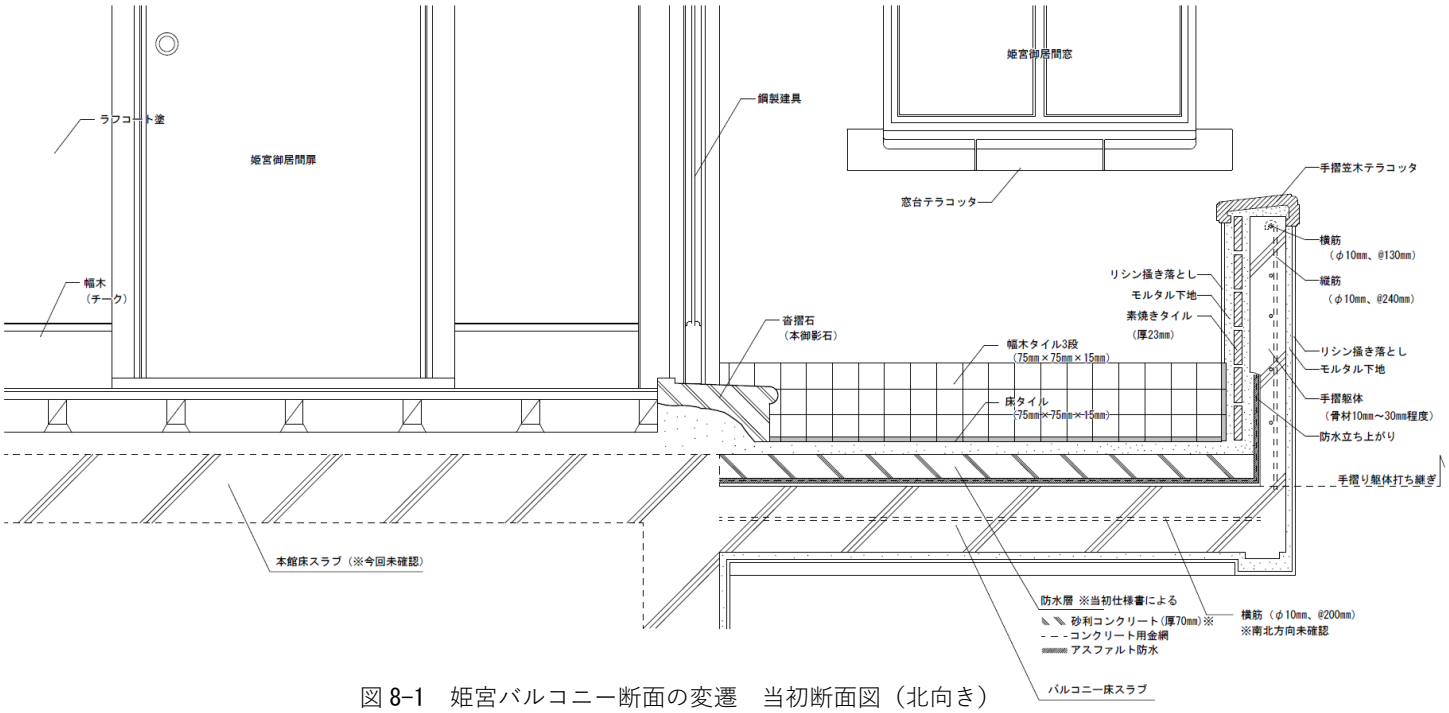


図 8-1　姫宮バルコニー断面の変遷　当初断面図（北向き）

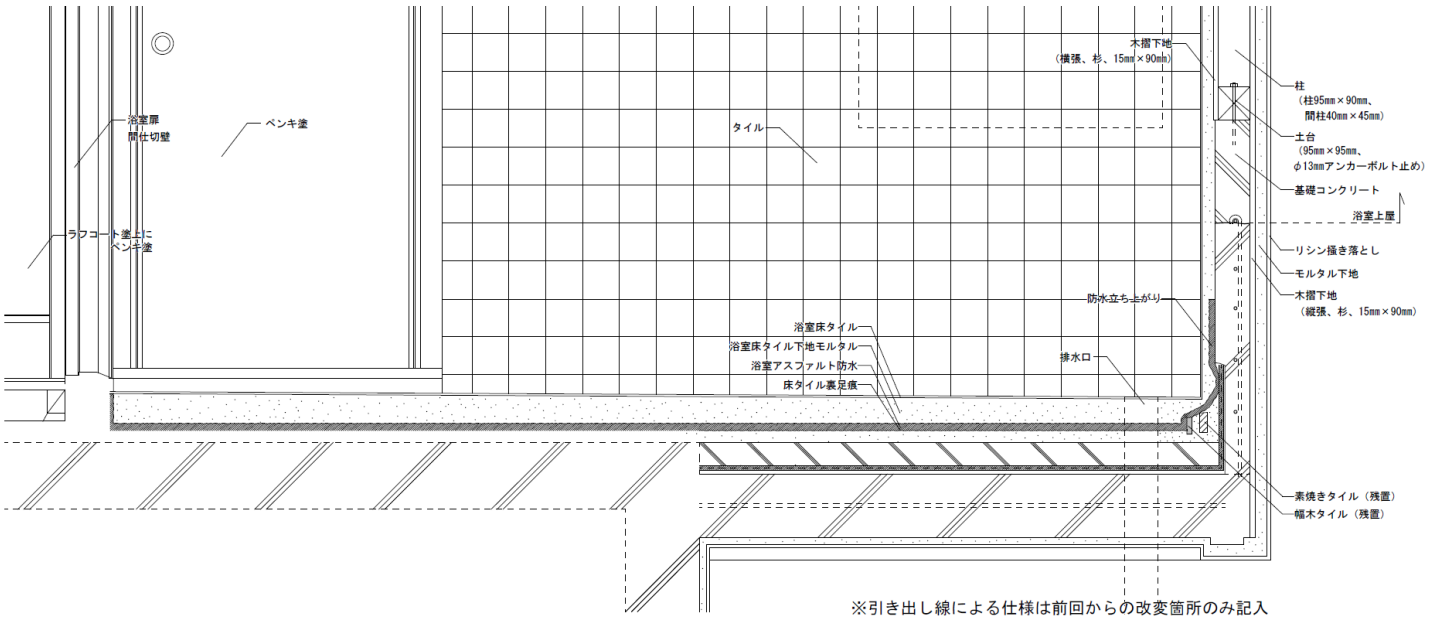


図 8-2　姫宮バルコニー断面の変遷　浴室増築時断面図（北向き）

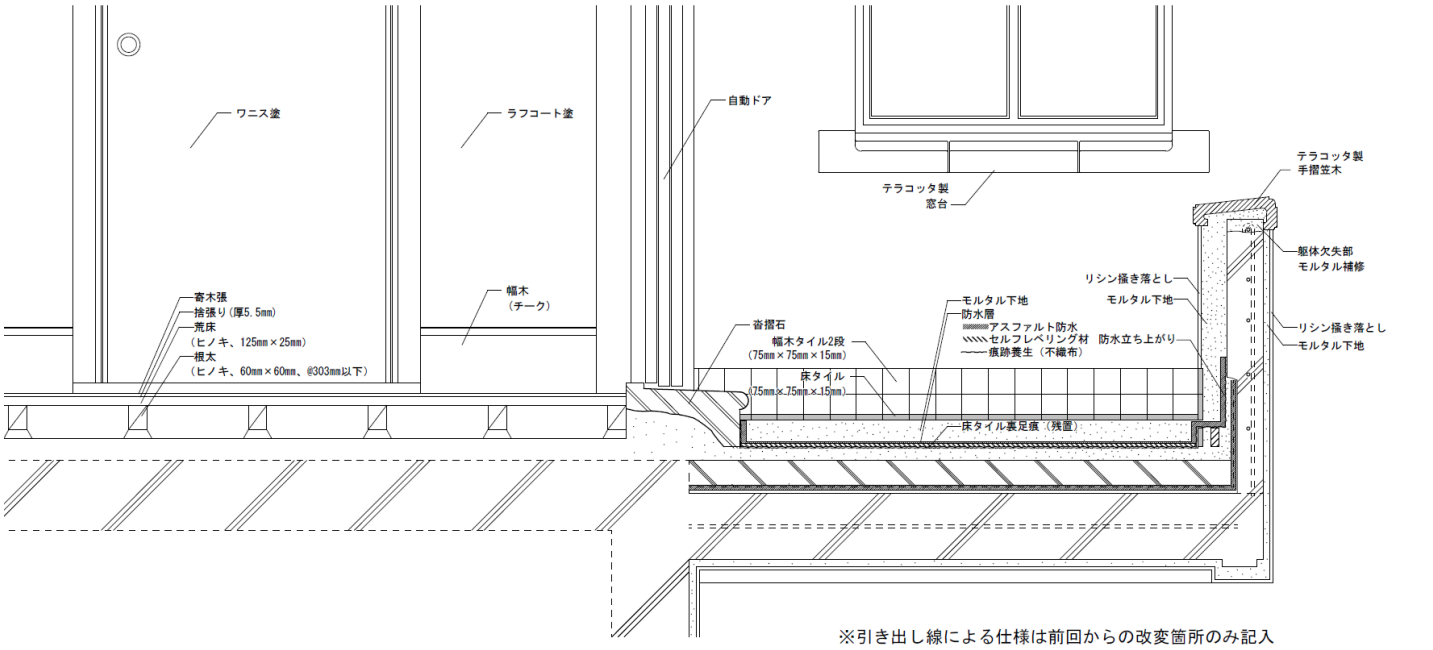
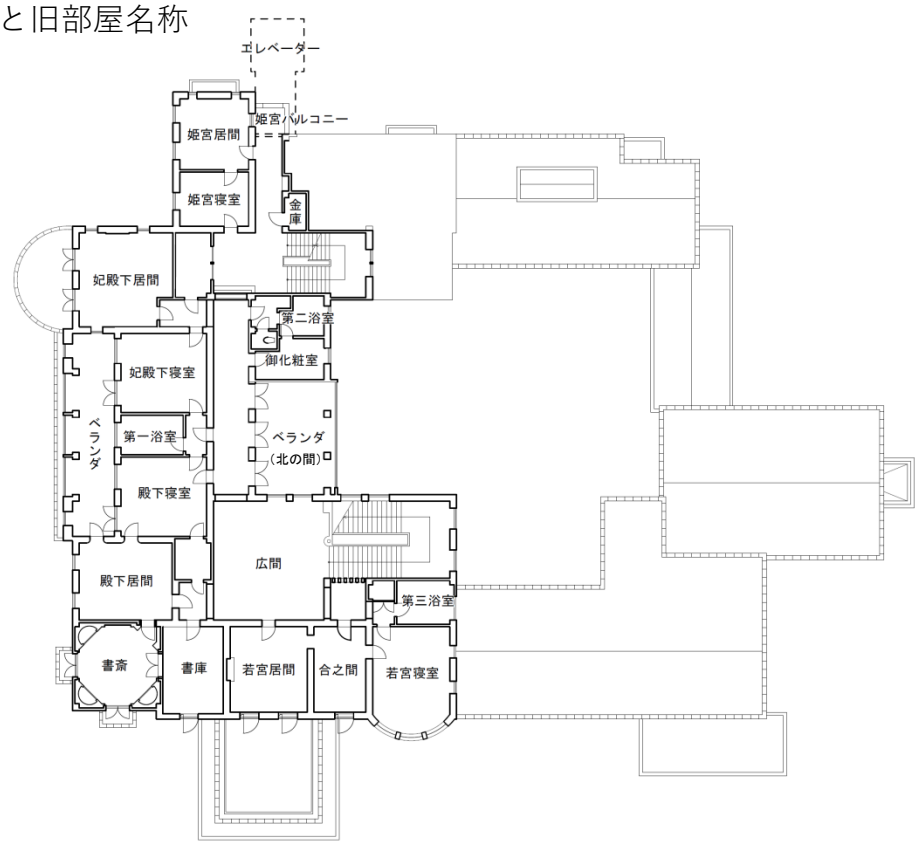


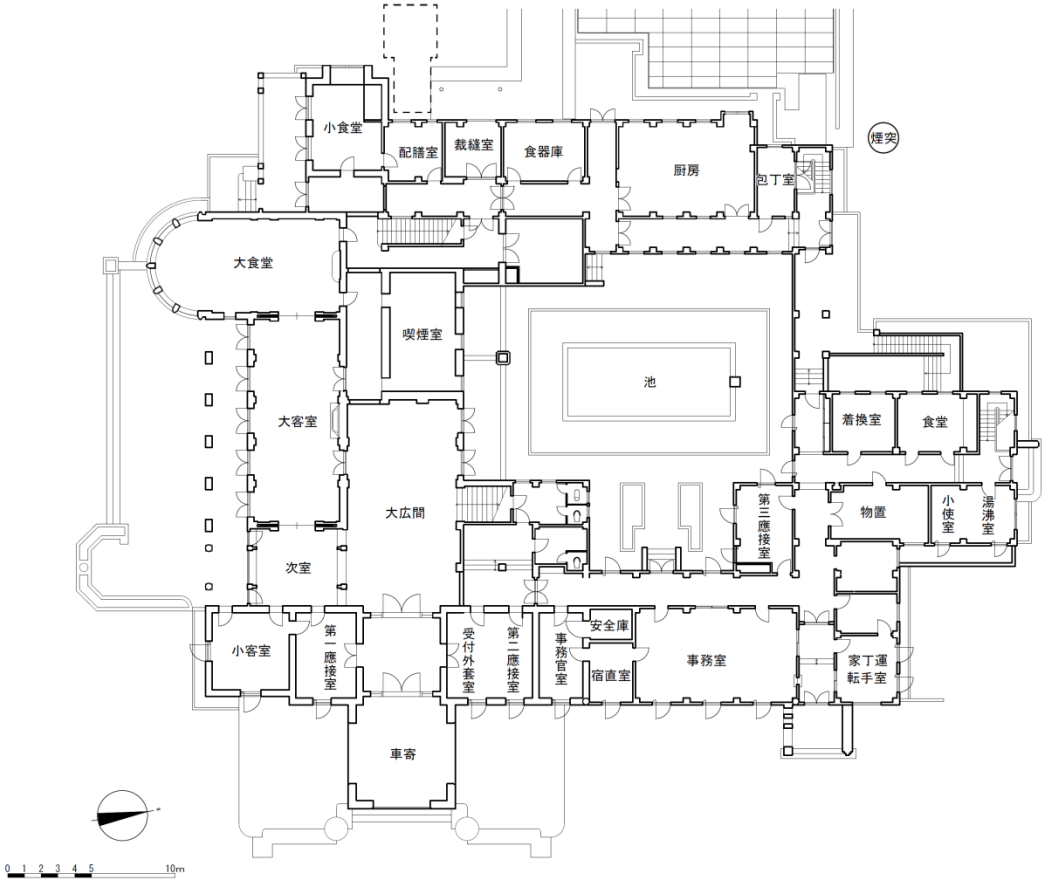
図 8-3　姫宮バルコニー断面の変遷　竣工断面図（北向き）

当初床タイル裏足の痕跡は貴重な資料として保護した上に防水・下地モルタル、床タイル貼を施した。

付録：平面図と旧部屋名称



2 階平面図



1 階平面図

付録：竣工・修理前写真

1　本館外観（東面・竣工）

2　本館外観（南面・竣工）

3　本館外観（西面・竣工）

4　本館外観（西面・修理前）

5　本館二階バルコニー外観（竣工）

6　本館二階浴室外観（修理前）

7　本館二階廊下、バルコニー（西面・竣工）

8　本館二階浴室（西面・修理前）

9　本館二階バルコニー（東面・竣工）

10　本館二階浴室（東面・修理前）

11　本館二階廊下（天井・竣工）

12　本館二階浴室（天井・修理前）

13　本館二階廊下、バルコニー（南面・竣工）

14　本館二階浴室（南面・修理前）

15　本館二階バルコニー（床面・竣工）

16　本館二階浴室（床面・修理前）

17　本館二階バルコニー全景（現状）
　　バリアフリー対応通路とするため置床を設置

18　本館二階バルコニー躯体切断状況

19　本館二階バルコニー躯体切断面（北側）

20　本館二階バルコニー躯体切断面（南側）

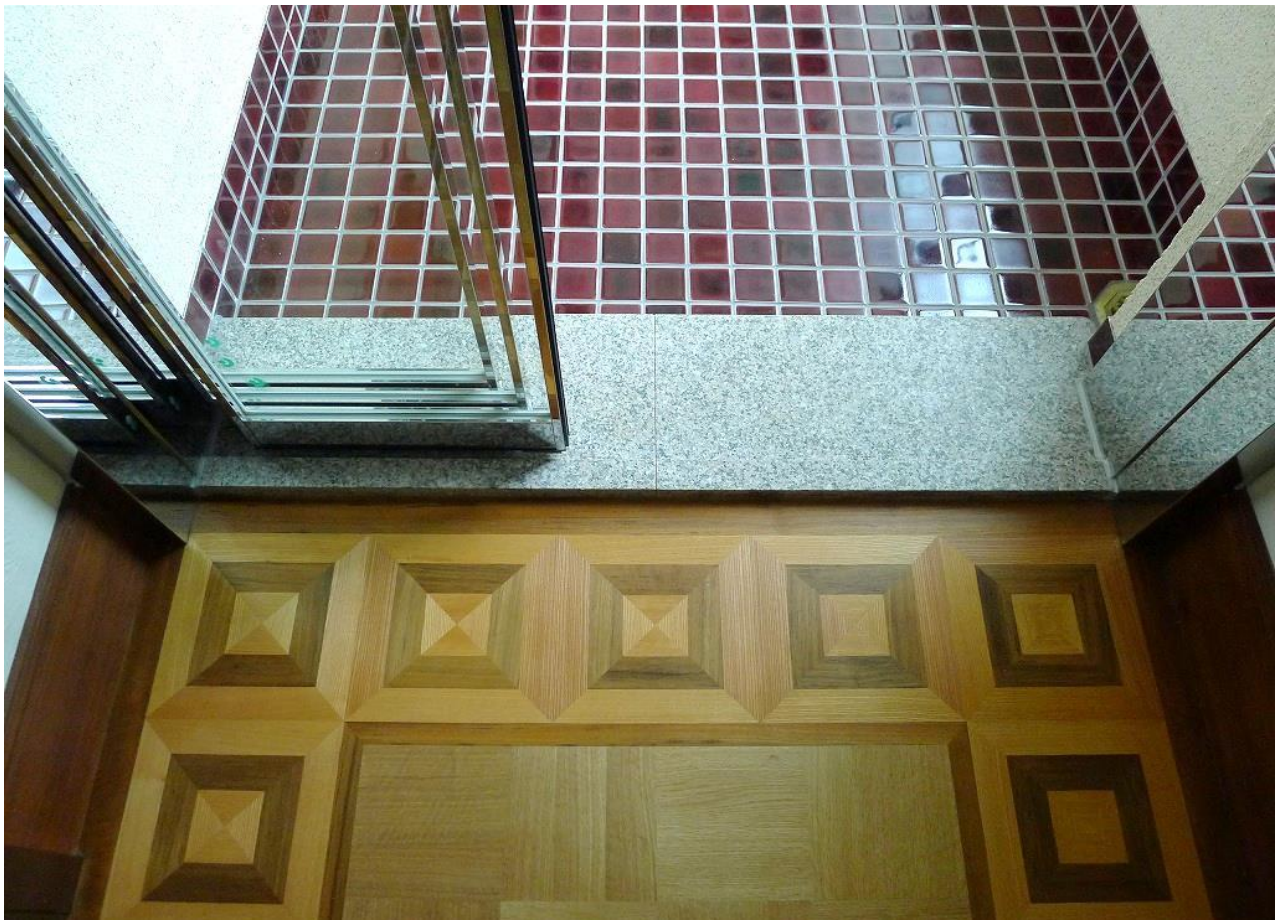
躯体の断面をそのまま見せることで、本来はバルコニーの手すりが連続していたことを表現した。

21　本館二階姫宮居間（北面・竣工）

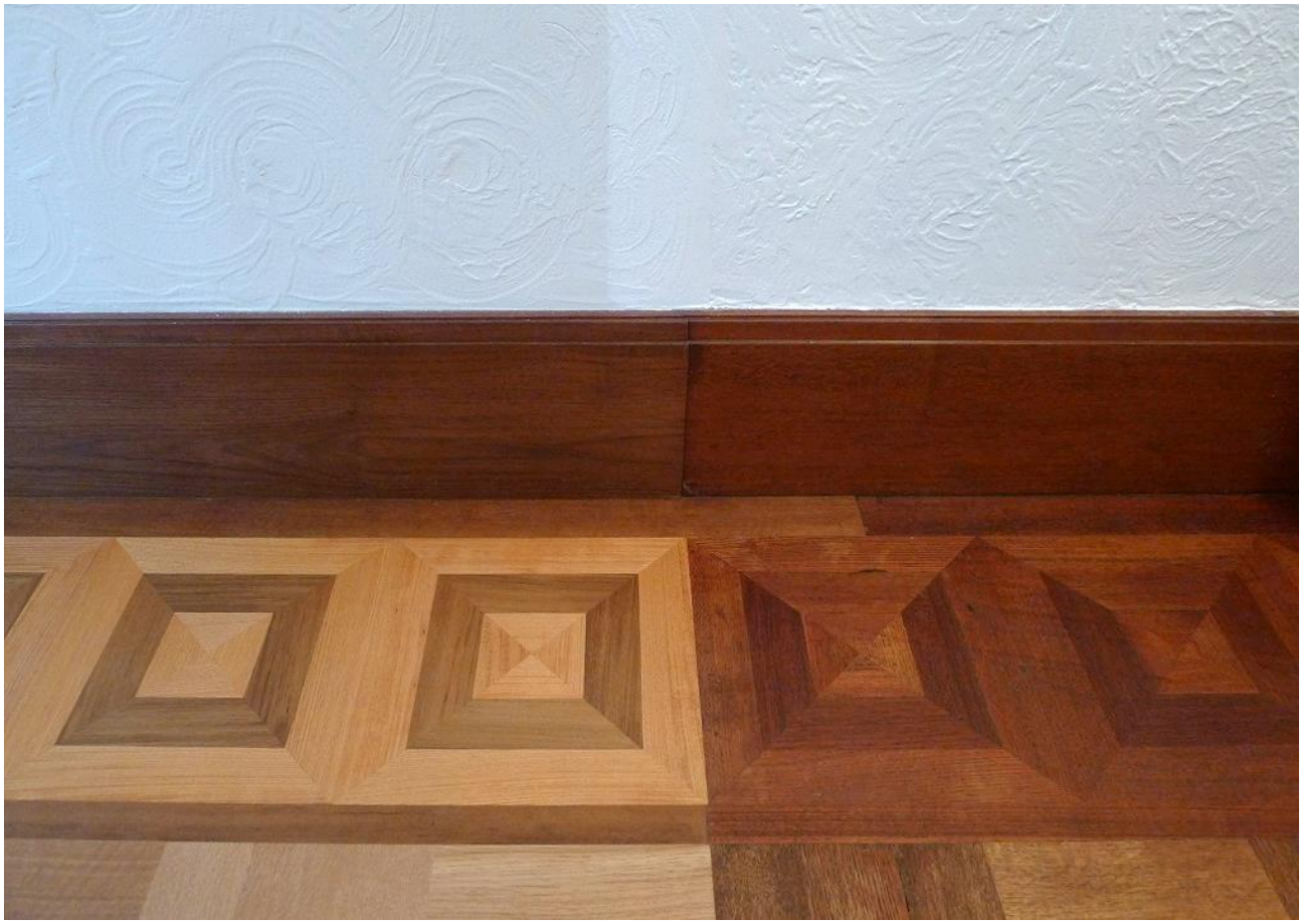
22　本館二階姫宮居間（北面・修理前）

23　本館二階バルコニー全景（竣工）
　　タイル貼、沓摺石、寄木貼を整備し、自動扉をカバー工法で設置した。

24　本館二階バルコニー（床面・竣工）　床タイル貼を整備



25　本館二階廊下、バルコニー（床面・竣工）　沓摺石を整備



26　本館二階廊下（竣工）写真左側：後設間仕切を撤去し、旧状に整備

27　本館二階バルコニー（竣工）　排水口を整備

東京都庭園美術館
紀要 2017-18

2018 年 3 月 30 日
ウェブサイト限定掲載

The Bulletin 2017-18
Tokyo Metropolitan Teien Art Museum

March 30, 2018
This Bulletin is only available on our website